

仙台平野の遺跡群 30

令和元年度 個人住宅他
国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書

洞ノ口遺跡第25次、
南小泉遺跡第84・85・86次、
富沢館跡第9・10・11・12・14・15・16次、
中田南遺跡第6次

2020年3月

仙台市教育委員会

仙台平野の遺跡群 30

令和元年度 個人住宅他
国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書

洞ノ口遺跡第25次、
南小泉遺跡第84・85・86次、
富沢館跡第9・10・11・12・14・15・16次、
中田南遺跡第6次

2020年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が遺っております。これらの一つ一つは、先人たちが残した貴重な文化遺産です。

平成23年3月11日の東日本大震災より9年が経ち、復興・創生期間4年目を迎えておりますが、個人住宅等の建築に伴う発掘届や発掘調査の件数は、平成23年度以降、震災前を上回る状況が継続しております。このようなかつ、仙台市教育委員会といたしましては、復旧・復興事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護と啓発に日々務めているところです。

本報告書には、個人住宅建設に伴って平成30年度から令和元年度にかけて発掘調査を実施した、洞ノ口遺跡第25次調査、南小泉遺跡第84・85・86次調査、富沢館跡第9・10・11・12・14・15・16次調査、中田南遺跡第6次調査の調査結果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を将来へ伝えるために守るべき大切な財産です。先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たちの使命であると思います。それは地域が育んだ文化を語る上で歴史や文化資源がその根柢をなしているからです。つきましては、本報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習などの文化活動に寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただいた多くの方々に心より感謝申し上げ、お礼の言葉とさせていただきます。

令和2年3月

仙台市教育委員会
教育長 佐々木 洋

例 言

1. 本書は、令和元年度個人住宅他国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書であり、洞ノ口遺跡第25次、南小泉遺跡第84・85・86次、富沢館跡第9・10・11・12・14・15・16次、中田南遺跡第6次の各発掘調査報告書を合本したものである。
2. 本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は妹尾一樹が行った。

第1章・第2章・第3章第3・4節・第4章第6節・第6章・第7章－妹尾一樹
第3章第1・2節・第4章第7節・第5章－柳澤楓 第4章第1～5節－及川謙作
第4章第8節－須貝慎吾

遺物の基礎整理－斎野裕彦、柳澤楓、妹尾一樹、向田文化財整理室作業員
遺物図・遺構図デジタルトレース－向田文化財整理室作業員
遺構註記表作成－各担当職員、向田文化財整理室作業員
遺物写真撮影・図版作成－向田文化財整理室作業員 遺構写真図版作成－妹尾一樹
3. 本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本文中の「～遺跡と周辺の遺跡」図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図を、また、「調査区位置図」などは仙台市発行の2千5百分の1都市基本図を、それぞれ修正して使用した。
2. 第3章、第5章の平面図中に示した方位は概ねの方位である。
3. 図中の座標値は世界測地系を使用している。
4. 遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し番号である。

SD：溝跡 SI：竪穴住居跡・竪穴遺構 SK：土坑 P：ビット
5. 遺物の略称は以下の通りである。

A：縄文土器 B：弥生土器 C：土師器（非クロクロ調整） D：土師器（クロクロ調整）・赤焼土器
E：須恵器 F：丸瓦 G：平瓦 H：その他の瓦 Ia：土師質土器 Ib：瓦質土器 Ic：陶器
J：磁器 K：石器・石製品 L：木製品 N：金属製品 O：自然遺物 P：土製品
6. 土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原1999）を使用した。
7. 遺構図に使用したトーンは以下の通りである。また、各図に必要に応じて凡例を付した。

[柱痕跡] : 柱痕跡 [燒土範圍] : 燒土範圍 [堀跡] : 堀跡

8. 遺物実測図に使用したトーンは以下の通りである。

[黑色處理] : 黒色処理

9. 遺物写真的縮尺は遺物図版に掲載した同一個体のそれに準ずる。写真掲載のみの遺物は、3分の1で掲載している。

目 次

第1章 調査計画と実績	1
第1節 調査体制	1
第2節 調査計画	1
第3節 調査実績	1
第2章 洞ノロ遺跡の調査	3
第1節 遺跡の概要	3
第2節 第25次調査	3
第3章 南小泉遺跡の調査	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 第84次調査	9
第3節 第85次調査	17
第4節 第86次調査	20
第4章 富沢館跡の調査	25
第1節 遺跡の概要	25
第2節 第9次調査	26
第3節 第10次調査	29
第4節 第11次調査	31
第5節 第12次調査	33
第6節 第14次調査	35
第7節 第15次調査	37
第8節 第16次調査	39
第5章 中田南遺跡の調査	42
第1節 遺跡の概要	42
第2節 第6次調査	42
第6章 郡山遺跡の調査	47
第7章 総括	48

挿図目次

第1図 平成30年度・令和元年度調査地点位置図 (国土地理院地図を一部改変)	6
第2図 洞ノロ遺跡と周辺の遺跡	9
第3図 第25次調査区位置図	10
第4図 第25次調査区配置図	10
第5図 第25次調査区平面・断面図	11
第6図 遺構出土遺物	12
第7図 遺構外出土遺物	13
第8図 南小泉遺跡と周辺の遺跡	13
第9図 第84次調査区位置図	14
第10図 第84次調査区配置図	14
第11図 第84次調査区平面・断面図	15
第12図 SI1堅穴住居跡出土遺物(1)	16
第13図 SI1堅穴住居跡出土遺物(2)	16

第14図	第85次調査区位置図	17	第29図	第11次調査区平面・断面図	32
第15図	第85次調査区配置図	17	第30図	第12次調査区配置図	33
第16図	第85次調査区平面・西壁斯面柱状図	18	第31図	第12次調査区平面・断面図	34
第17図	第85次調査出土遺物	18	第32図	第14次調査区配置図	35
第18図	南小泉遺跡・養種園遺跡 縄文土器出土地点	19	第33図	第14次調査区平面・断面図	36
第19図	第86次調査区位置図	20	第34図	第15次調査区配置図	37
第20図	第86次調査区配置図	20	第35図	第15次調査区平面・断面図	38
第21図	第86次調査区平面・断面図	22	第37図	第16次調査区平面・断面図	40
第22図	富沢館跡と周辺の遺跡	25	第38図	富沢館跡 検出埋跡位置図	41
第23図	富沢館跡調査区位置図	26	第39図	中田南遺跡と周辺の遺跡	42
第24図	第9次調査区配置図	26	第40図	第6次調査区位置図	43
第25図	第9次調査区平面・断面図	27	第41図	第6次調査区配置図	43
第26図	第10次調査区配置図	29	第42図	第6次調査区平面・断面図	44
第27図	第10次調査区平面・断面図	30	第43図	第6次調査出土遺物	45
第28図	第11次調査区配置図	31	第44図	郡山遺跡調査区位置図	47

挿表目次

表1	平成30年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧	1
表2	令和元年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧	2
表3	第86次 出土遺物観察表	22
表4	令和元年度 郡山遺跡発掘調査一覧（一部平成30年度実施分を含む）	47

写真図版目次

写真図版1	洞ノ口遺跡第25次調査(1)	7	写真図版7	富沢館跡第9次調査	28
写真図版2	洞ノ口遺跡第25次調査(2) ・出土遺物	8	写真図版8	富沢館跡第10次調査	30
写真図版3	南小泉遺跡第84次調査	15	写真図版9	富沢館跡第11次調査	32
写真図版4	南小泉遺跡第84次調査出土遺物	16	写真図版10	富沢館跡第12次調査	34
写真図版5	南小泉遺跡第85次調査 ・出土遺物	19	写真図版11	富沢館跡第14次調査	36
写真図版6	南小泉遺跡第86次調査 ・出土遺物	24	写真図版12	富沢館跡第15次調査	38
			写真図版13	富沢館跡第16次調査	40
			写真図版14	中田南遺跡第6次調査 ・出土遺物	46

第1章 調査計画と実績

第1節 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課

平成30年度

【文化財課】課長 長島栄一

【調査調整係】係長 平間亮輔 主任 及川謙作

主事 小林航 三浦一樹 妹尾一樹 相川ひとみ 柳澤楓

文化財教諭 大友涉 栗和田洋郎 佐藤文征 尾形隆寛 及川基

専門員 渡部弘美 斎野裕彦

【整備活用係】係長 佐藤淳 主任 稲垣正志 小野寺啓次

主事 庄子裕美 五十嵐愛 文化財教諭 斎藤健一 三浦昂也

令和元年度

【文化財課】課長 長島栄一

【調査調整係】係長 平間亮輔 主任 及川謙作

主事 妹尾一樹 相川ひとみ 木村恒 柳澤楓 佐藤恒介

文化財教諭 元山祐一 大友涉 栗和田洋郎 尾形隆寛

専門員 斎野裕彦

【整備活用係】係長 佐藤淳 主任 小野寺啓次 高橋敬子

主事 庄子裕美 五十嵐愛

文化財教諭 斎藤健一 三浦昂也 佐藤文征

専門員 渡部弘美

第2節 調査計画

主に個人専用住宅の建築に伴う発掘調査費用の補助を目的とし、「個人専用住宅補助事業費」として、総額9,676千円（このうち補助金額4,838千円）の予算で20件の調査を計画した。

第3節 調査実績

平成30年度から令和元年度（平成31年1月～令和元年12月）にかけて実施した調査は表1・2の通りで、合計36件である。このうち本書に収録したのは表に示した8件と平成30年10月～12月に実施した4件の計12件である。

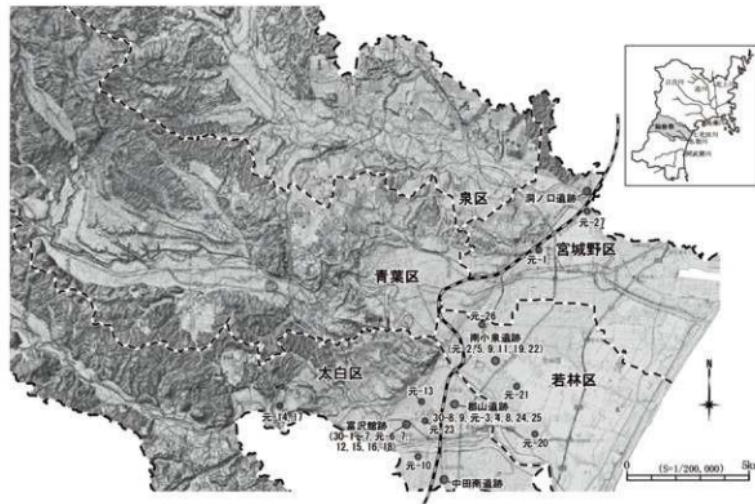
表1 平成30年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧

(平成31年1月～3月)

番号	調査名	道跡名	所在地	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	調査期間	遺構・遺物	届出場所	報告書
1	H30-77	喜代振跡	太白区喜代字字館	71.4 m ²	12.0 m ²	1月8日	遺構・遺物なし	H30 102-457	—
2	H30-78	喜代振跡	太白区喜代字字館	66.8 m ²	12.0 m ²	1月8日～10日	遺跡1点	H30 102-458	第10次
3	H30-79	喜代振跡	太白区喜代字字館	61.4 m ²	12.0 m ²	1月8日～10日	遺跡1点	H30 102-459	第9次
4	H30-80	喜代振跡	太白区喜代字字館	73.9 m ²	8.12 m ²	1月17日	遺跡1点	H30 102-460	第11次
5	H30-81	喜代振跡	太白区喜代字字館	66.0 m ²	12.0 m ²	1月16日	遺跡1点	H30 102-461	—
6	H30-82	喜代振跡	太白区喜代字西23街区	67.0 m ²	12.0 m ²	1月15日	遺跡1点	H30 102-462	第12次
7	H30-83	喜代振跡	太白区喜代字西23街区	58.5 m ²	12.0 m ²	1月16日～17日	土坑1、ビット3	H30 102-463	—
8	H30-87	郡山遺跡	太白区郡山二丁目	96.3 m ²	22.0 m ²	2月12日～3月8日	廻穴居跡3、材木排列跡1点、土坑跡、施設跡など	H30 102-464	第292次
9	H30-89	郡山遺跡	太白区郡山三丁目	59.6 m ²	22.0 m ²	3月12日～3月27日	遺跡10、性格不明遺構1点、土坑跡、施設跡など	H30 102-465	第291次

表2 令和元年度 個人住宅の建築に伴う発掘調査一覧 (平成31年4月～令和元年12月)

調査No.	調査地名	遺跡名	所在地	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	調査期間	遺構・遺物	届出等No.	報告書
1	H31-1	小鶴塚跡	宮城町区新田三丁目	108.1 m ²	15.0 m ²	4月 4日	遺構・遺物なし	H30 102-294	—
2	H31-3	南小泉遺跡	若林区南小泉二丁目	67.1 m ²	13.0 m ²	4月 8日～10日	堅穴溝構1基、土坑5基	H30 102-194	第 86 次
3	H31-5	燃山遺跡	太白区燃山三丁目	51.6 m ²	15.0 m ²	5月 20日	ピット4基	H31 101-43	第 296 次
4	H31-6	燃山遺跡	太白区燃山三丁目	69.3 m ²	17.5 m ²	6月 4日～6月 5日	窓井1条、ピット6基	H30 102-586	第 295 次
5	H31-7	南小泉遺跡	若林区南小泉三丁目	121.7 m ²	18.0 m ²	5月 29日～6月 3日	堅穴溝構1基、遺跡2条	H31 101-55	次年度以降
6	H31-9	富沢駒塚跡	太白区富沢駒塚29街区	95.0 m ²	12.0 m ²	6月 12日	遺構・遺物なし	H31 101-68	—
7	H31-11	富沢駒塚跡	太白区富沢駒塚29街区	66.2 m ²	12.0 m ²	6月 19日～20日	堅跡1条	H31 101-90	第 14 次
8	H31-12	燃山遺跡	太白区燃山六丁目	49.7 m ²	12.5 m ²	6月 25日	遺構・遺物なし	H30 101-98	第 297 次
9	H31-13	南小泉遺跡	若林区古城二丁目	83.6 m ²	13.0 m ²	7月 2日	等地盤	H31 101-109	—
10	H31-17	柳生台遺跡	大白区柳生台字北原	61.6 m ²	12.0 m ²	7月 25日	遺構・遺物なし	H31 101-106	—
11	H31-20	南小泉遺跡	若林区南見塙二丁目	82.0 m ²	12.0 m ²	8月 1日	遺構・遺物なし	H31 101-125	—
12	H31-21	富沢駒塚跡	太白区富沢駒塚22街区	82.4 m ²	15.0 m ²	8月 6日	遺構・遺物なし	H31 101-160	—
13	H31-23	富沢駒塚跡	太白区富沢駒塚三丁目	94.8 m ²	15.0 m ²	8月 27日	木造耕作土	H31 101-162	—
14	H31-24	人来田遺跡	太白区人来田三丁目	76.2 m ²	8.0 m ²	8月 29日	遺構・遺物なし	H31 101-164	—
15	H31-32	富沢駒塚跡	太白区富沢駒塚2街区	63.8 m ²	15.0 m ²	9月 18日	堅跡1条、ピット1基	H31 101-178	第 15 次
16	H31-33	富沢駒塚跡	太白区富沢駒塚字御宇	68.5 m ²	8.0 m ²	9月 30日	ピット1基	H31 101-221	—
17	H31-34	人来田遺跡	太白区人来田三丁目	56.3 m ²	12.0 m ²	9月 25日	遺構・遺物なし	H31 101-201	—
18	H31-36	富沢駒塚跡	太白区富沢駒塚字御宇	94.1 m ²	15.0 m ²	10月 17日	堅跡1条	H31 101-268	第 16 次
19	H31-38	南小泉遺跡	若林区南小泉二丁目	49.7 m ²	9.0 m ²	10月 18日	ピット12基	H31 101-277	—
20	H31-41	今泉遺跡	若林区今泉二丁目	64.6 m ²	12.0 m ²	11月 13日	窓井1条	H31 101-287	—
21	H31-45	仲野塚跡	若林区仲野七丁目	59.2 m ²	12.0 m ²	11月 25日	遺構・遺物なし	H31 101-263	—
22	H31-46	南小泉遺跡	若林区南見塙一丁目	49.7 m ²	10.0 m ²	12月 2日～3日	土坑2基、性別不明遺構1基、土壙器、土師器など	H31 101-264	次年度以降
23	H31-48	大野田古墳群	太白区大野田五丁目	163.5 m ²	18.0 m ²	12月 4日	小溝、ピット	H31 101-302	—
24	H31-51	燃山遺跡	太白区燃山五丁目	55.9 m ²	18.0 m ²	12月 10日～23日	土坑、性別不明遺構、ピットなど	H31 101-344	第 302 次
25	H31-52	燃山遺跡	太白区燃山五丁目	54.7 m ²	14.0 m ²	12月 10日～23日	柱立建物跡、土坑など	H31 101-345	第 303 次
26	H31-53	陸奥国分寺跡調査地	若林区木下二丁目	73.9 m ²	4.0 m ²	12月 16日	遺構・遺物なし	H31 102-57	—
27	H31-54	舟ノ堀遺跡	宮城町区舟切字三所南	96.3 m ²	12.0 m ²	12月 18日	土壙器、板窓器	H31 101-355	—



第1図 平成30年度・令和元年度 調査地点位置図（国土地理院地図を一部改変）

第2章 洞ノ口遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

洞ノ口遺跡は仙台市宮城野区岩切字洞ノ口・青津目・分台に所在する。仙台市の東部、JR 岩切駅の北側に位置し、七北田川によって形成された自然堤防上から後背湿地にかけて立地している。遺跡の範囲は東西 500 ~ 600m、南北 1000m に及ぶ。

遺跡では区画整理事業や個人住宅建設などに伴い、これまでに 24 回にわたり調査が行われ、古墳時代から近世にかけての遺構、遺物が発見されている。遺構は、13 世紀頃の屋敷跡と 15 世紀後半から 16 世紀にかけての城館に関する縄跡や建物跡などが発見されている。遺物は在地の土器類の他、遠隔地からもたらされた陶磁器類や、金属製品、木製品など多種多様な製品が出土している。

また、遺跡の所在する岩切地区には中世の遺跡が集中して分布している。西側では東光寺遺跡や羽黒前遺跡などをはじめとして、板碑群が集中する宗教的空間が展開している他、岩切城跡、東光寺城跡、化粧坂城跡など軍事的な性格をもった遺跡が広がっている。また、七北田川の対岸には今市遺跡や鴻ノ巣遺跡などの屋敷跡が広がっている。市場とのかかわりや陸上、水上交通の要所であったことが指摘されており、岩切地区周辺は中世における重要な地域であったと考えられる。

第2節 第 25 次調査

1. 調査要項

- 遺 跡 名 洞ノ口遺跡（宮城県遺跡登録番号 01372）
 調 査 地 点 仙台市宮城野区岩切字洞ノ口 89 番地 3、82 番地 43 の一部
 調 査 期 間 平成 30 年 10 月 22 日～23 日
 調査対象面積 69.41 m²
 調査面積 約 17.5 m²
 調査原因 個人住宅建築工事
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
 担当職員 主事 妹尾一樹 文化財教諭 栗和田祥郎



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	洞ノ口遺跡	集落跡、城郭跡、屋敷跡、水田跡	自然堤防	古墳～近世
2	今市遺跡	集落跡、包含地	自然堤防	古代、中世
3	浦ノ巣遺跡	集落跡、屋敷跡、水田跡	自然堤防	弥生～中世
4	洞ノ口板碑群	板碑	自然堤防	中世
5	岩切三北北 A 板碑	板碑	自然堤防	中世
6	岩切三北北 B 板碑	板碑	自然堤防	中世
7	化粧坂城跡	城郭跡	丘陵	中世
8	羽黒前遺跡	城郭跡、宗教遺跡	丘陵	中世、近世
9	羽黒前板碑群	板碑	丘陵	中世
10	岩切古墳跡	城郭跡、信仰遺跡	丘陵	古文、古代～近世
11	東光寺遺跡	城郭跡、石窟寺、寺院跡、集落跡、板碑群	丘陵斜面	中世
12	東光寺禪穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
13	地藏堂板碑群	板碑	丘陵斜面	中世
14	東光寺板碑群	板碑	丘陵斜面	中世
15	東光寺宝塔群	石窟寺	丘陵斜面	中世
16	新宿圓墳跡	散在地	自然堤防	古代
17	岩切城跡	城郭跡	丘陵	中世

第2図 洞ノ口遺跡と周辺の遺跡

第2節 第25次調査



第3図 第25次調査区位置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成30年8月24日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について（通知）」（平成30年8月27日付H30教生文第102-247号で通知）に基づき実施した。

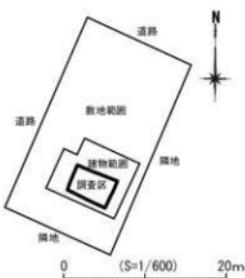
建築予定範囲内に $3.50 \times 5.0\text{m}$ の規模で調査区を設定し、重機により盛土及びⅠ～Ⅱ層を除去した。Ⅲ層上面 ($GL -0.7 \sim 0.8\text{m}$) で遺構検出作業を行ったところ、土坑2基、ピット26基を確認した。

調査では必要に応じて、平面図 ($S = 1/20$) および断面図 ($S = 1/20$) を作製し、写真記録はデジタルカメラにより撮影した。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

今回の調査では盛土（層厚50cm）の下に基本層を大別3層、細別4層確認した。今回の遺構検出面はⅢ層上面 ($GL -0.5 \sim 0.6\text{m}$) である。

- I 層 : 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土。10YR4/3 黄褐色砂を斑状に含む。層厚15～20cm。
- II a層 : 10YR3/3 暗褐色シルト質粘土。10YR4/3 黄褐色砂を少量含む。下面で凹凸が認められ、耕作土の可能性がある。層厚8～18cm。
- II b層 : 10YR3/4 暗褐色シルト質粘土。酸化鉄を少量含む。調査区南側でのみ確認された。層厚2～6cm。
- III 層 : 10YR5/6 黄褐色シルト質砂。砂を少量含む。調査区の大部分でグライ化している。今回の遺構検出面である。



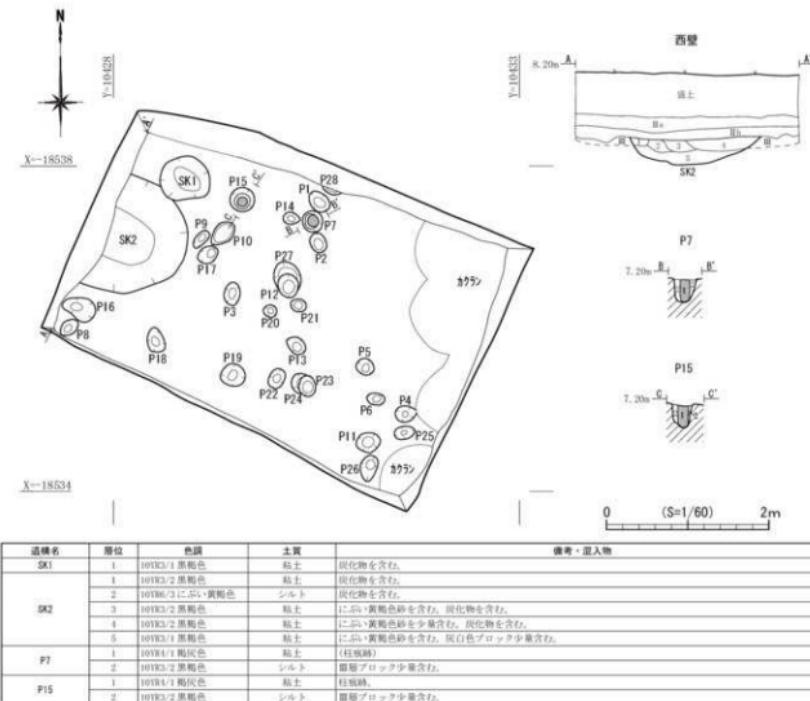
第4図 第25次調査区配置図

4. 発見遺構と出土遺物

(1) 土坑

SK1 土坑 (第5図)

調査区西部で確認した。規模は直径 60cm で平面形は不整な円形を呈する。深さは 32cm で断面形は逆台形状を呈する。堆積土は単層である。SK2 土坑と重複しており、それよりも新しい。遺物は出土していない。

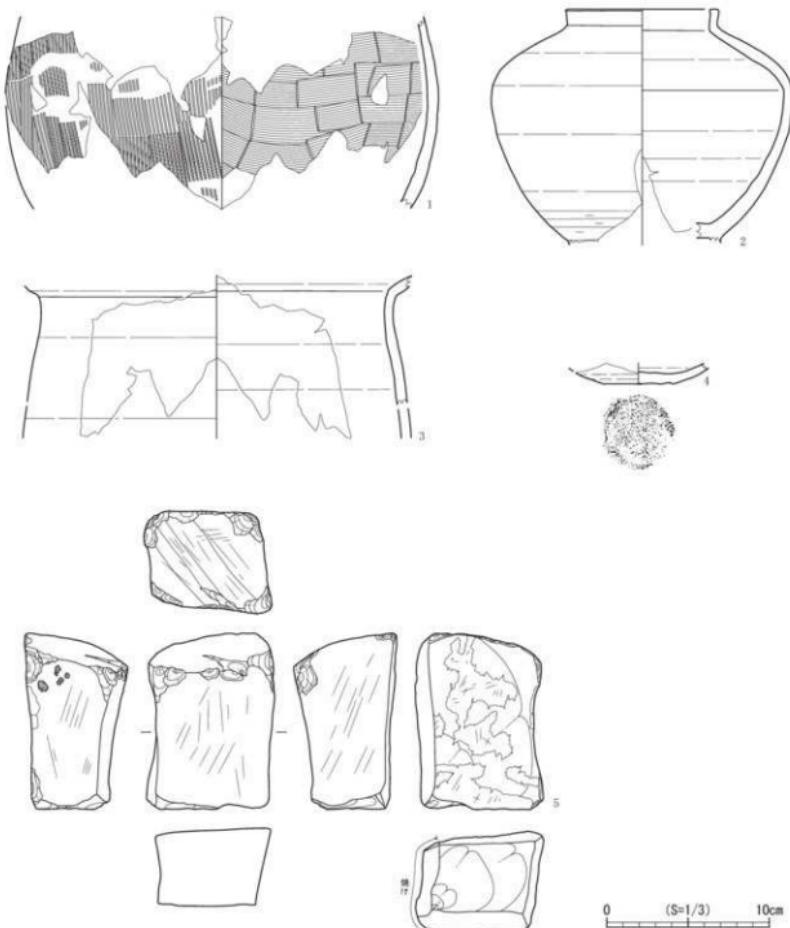


第5図 第25次調査区平面・断面図



回数 番号	登録 番号	出土 遺構	位置	種別	基準	径量 (cm)			外面	内面	備考	写真 図版
						口径	底径	高さ				
1	lc-1	P11	堆積土	陶器	他	-	-	(3.5)	ヘラナゲ→漿状凹印	ロクロナゲ	粘土陶器 壁地:在地	2-1
2	lc-2	SK2	堆積土	陶器	他	-	-	(3.5)	ロクロナゲ→漿状凹印	ナゲ	粘土陶器 壁地:在地	2-2

第6図 遺構出土遺物



遺物 番号	登録 番号	出土 遺構	部位	種別	基準	重量(cm)			外観	内面	備考	写真 図版
						口径	底径	厚さ				
1	C-1	基本型	■	土師器	他	-	-	-	(11.8) ハケメ	ヘラナデ	粘土無漆 細軸灰む	2-3
2	E-2	ET	-	須恵器	高台付 輪郭造	(9.4)	-	(11.6)	ロクロナデ-体下端部凹凸ハケズリ	ロクロナデ	粘土無漆 細軸灰む	2-4
3	E-1	基本型	■	土師器	他	-	-	-	(10.0) ロキロナデ	ロクロナデ	粘土無漆 細軸灰む	2-5
4	E-1	基本型	■	須恵器	环	-	4.4	(1.20)	体:ロクロナデ 底:凹軸み切り 斜面型	ロクロナデ	粘土無漆	2-6
5	K-1	基本型	■	石製品	砾石	16.8	7.7	4.6	全面に鉋面が形成。角柱状。各面の縦辺面に受熱痕。石材:砂岩 重さ 220g			2-7

第7図 遺構外土遺物

SK2 土坑（第5図）

調査区西部で確認した。西半部は調査区外であるが、平面形は円形あるいは梢円形を呈すると推定される。規模は南北長150cmである。深さは33cmで断面形はU字形を呈する。堆積土は5層に分層した。SK1土坑と重複しており、それよりも古い。遺物はロクロ土師器が1点と中世陶器が1点出土している（第6図2）。在地産と考えられる甕の肩部で、外面には簾状押印が認められる。

（2）ピット（第5図）

26基検出した。そのうちP7とP15では柱痕跡を確認した。規模はP7が径27cm、深さ30cmで、P15が径28cm、深さ28cm程度である。P7とP15の間隔は約90cmで、何らかの建物を構成していた可能性があるが詳細は不明である。P7からは須恵器が1点出土している。その他のピットからは土師器、中世陶器、鉄滓が出土している。そのうち中世陶器を掲載した（第6図1）。在地産と考えられる甕の肩部で、外面には簾状押印が認められる。

（3）遺構外の出土遺物（第7図）

基本層Ⅲ層中と搅乱から土師器、須恵器、石製品が出土した。そのうち土師器（第7図1・3）と須恵器（同図2・4）、石製品（同図5）を掲載した。1はハケメ調整による甕の体部で外面には火を受けた痕が残る。3はロクロ調整による土師器甕の体部。2は須恵器の短頸壺であり、高台をもつ。4は須恵器壺の底部であり、焼成不良のため、色調は黄橙色を呈する。5は砂岩製の砥石。砥面は5面確認できる。各面の形状や擦痕の様相が異なっている。

5.まとめ

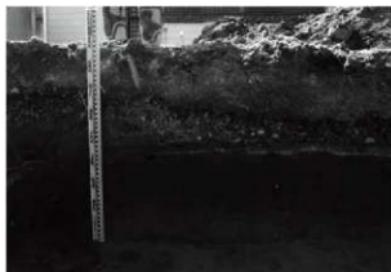
今回の調査地点は、洞ノ口遺跡の南西部に位置する。調査では土坑2基とピット26基を確認した。検出したピットのうちP7とP15では柱痕跡を確認している。建物を構成していた可能性が考えられるが、調査面積の制約もあり詳細については不明である。また、出土遺物からはSK1・2土坑は13世紀後半以降、ピット群は古代～中世にかけての時期の遺構と考えられる。

参考文献

入間田宣夫・大石直正編 1992 『上みがえる中世 7 みちのくの都 多賀城・松島』平凡社



1. 遺構完掘状況（南東から）

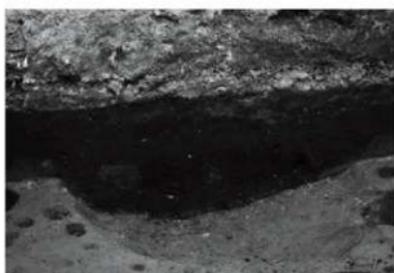


2. 調査区西壁断面（南東から）

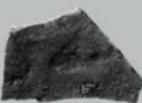
写真図版1 洞ノ口遺跡第25次調査（1）



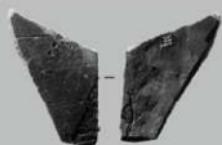
1. SK1 土坑土層断面（南東から）



2. SK2 土坑土層断面（南東から）



1
(第6図1)



2
(第6図2)



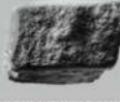
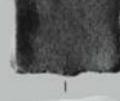
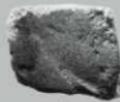
3
(第7図1)



4
(第7図2)



5
(第7図3)



6
(第7図4)

7
(第7図5)

写真図版2 洞ノ口遺跡第25次調査(2)・出土遺物

第3章 南小泉遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

南小泉遺跡は、仙台市の東部、JR仙台駅の東南約3.5kmの地点に位置する。広瀬川と名取川の合流地点より北へ約3kmの場所にあり、「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野の自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は東西約2km、南北約1kmに及んでおり、標高は7～14mである。仙台市内でも最大級の規模を持つ遺跡である。

本遺跡は、昭和14年の霞ヶ浦飛行場拡張工事の際に弥生時代と古墳時代の遺構と遺物が発見されて以来、これまでに83次に及ぶ調査が行われ、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。特に弥生・古墳時代の集落跡として知られ、東北地方南部の古墳時代中期の土器「南小泉式」の標式遺跡である。

また、遺跡内には遠見塚古墳があり、西部では若林城跡、北西部では養種園遺跡と接し、周辺には法領塚古墳、蛇塚古墳、猫塚古墳などが分布する。

第2節 第84次調査

1. 調査要項

遺跡名	南小泉遺跡
	(宮城県遺跡登録番号01021)
調査地点	仙台市若林区遠見塚一丁目225-5
調査期間	平成30年12月5日～12月7日
調査対象面積	80.75 m ²
調査面積	約13.4 m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課
調査調整係	
担当職員	主事 柳澤 楓 文化財教諭 佐藤 文征



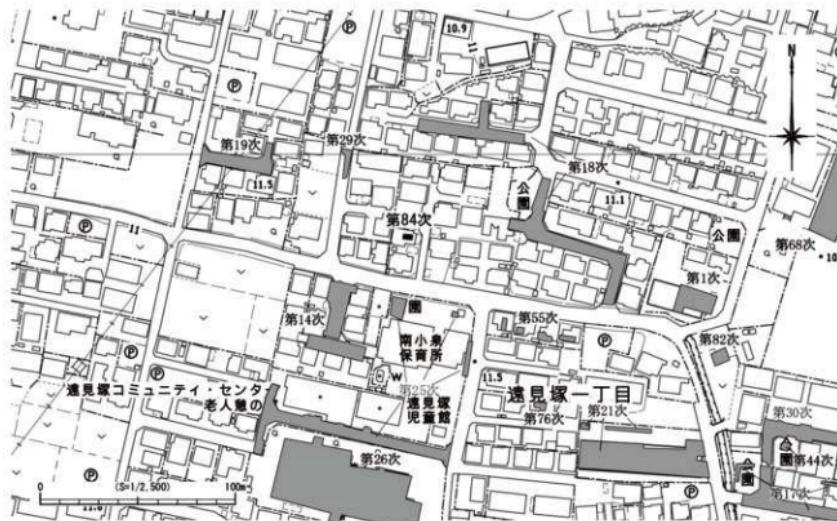
番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	南小泉遺跡	集落跡、居住跡	自然堤防	弥生～近世
2	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
3	若林城跡	河岸、集落跡	自然堤防	古墳～近世
4	養種園遺跡	集落跡、居住跡	自然堤防	縄文、古墳～近世
5	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
6	蛇塚古墳	円墳	自然堤防	古墳

第84回 南小泉遺跡と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成30年10月31日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成30年11月2日付H30教生文第102-370号で通知)に基づき実施した。調査では対象地に東西3m、南北5mの調査区を設定した。重機により盛土および基本層I層を除去後、II層上面(GL-0.6m)で遺構検出作業を行い、堅穴住居跡1軒、溝跡2条を確認した。

調査では適宜、平面図(S=1/20)および断面図(S=1/20)を作製し、記録写真はデジタルカメラにより撮影した。記録調査終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。



第9図 第84次調査区位置図

3. 基本層序

盛土(厚さ10~20cm)の下に基本層を大別で2層、細別で4層確認した。

今回、遺構検出作業を行ったのは、II層上面 (GL-0, 6m) である。

I-a層：10YR3/3暗褐色シルト。炭化物・白色砂を少量含む。

盛土以前の耕作土である。層厚 20~25 cm である。

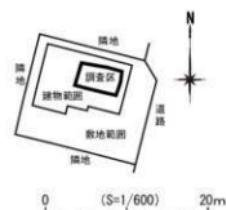
J.b層：10YR3/4 暗褐色シルト。黒褐色粘土ブロックを含む。

層厚 10 ~ 20 cm である。

Ic層：10YR3/4暗褐色シルト。天地返し層である。

II 層：10YR5/4 に近い黄褐色粘土質シルト、黒色粘土ブロック

を含む。今回の調査の遺構検出面である。層厚は不明。



第10圖 第84次調查區配置圖

4. 發見遺構と出土遺物

(1) 墓穴住居跡

SII 穴住居跡（第11図）

【重複】 SD1 滝跡より古く、SD2 滝跡より新しい。

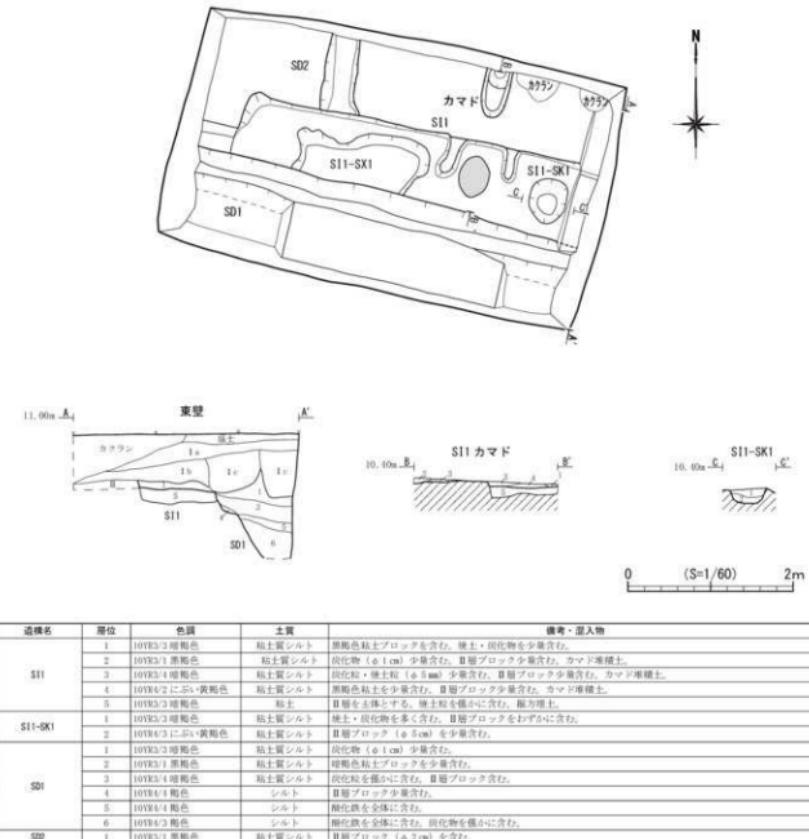
【規模・平面形】住居北側一部分のみの検出で、東西検出長 4.4m、南北検出長 0.8m である。平面形状は、隅丸方形を呈する。基部は、

【堆積土】1層が住居内堆積土、2~4層がカマド内堆積土、5層が掘方埋土である。

【壁面】やや外傾して立ち上がる

【床面】住居掘方埋土である5層を床面としている

【主柱穴】想定の位置は SD1 滅跡と重複しており、確認されなかつた

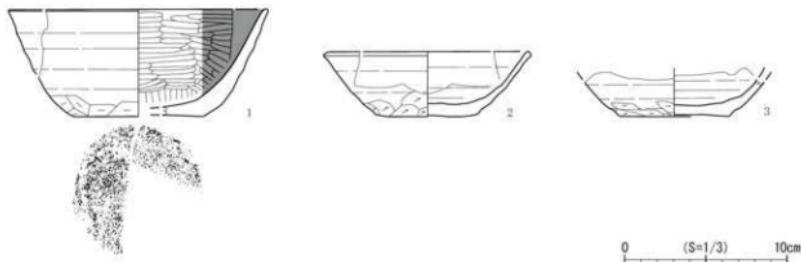


第11図 第84次調査区平面・断面図

【周溝】確認されなかった。

【カマド】1基のカマドを確認した。住居北辺で両袖と燃焼部を確認した。袖の規模は西袖が長さ50cm、幅23cm、東袖が長さ42cm、幅18cmである。燃焼部の規模は、奥行き約70cm、幅62cmである。堆積土は焼土・炭化物を多量に含んでおり、底面では僅かに被熱痕跡を確認した。煙道部は僅かであるが残存しており、検出規模は長さ58cm、幅32cm、深さ8cmである。底面は、先端部に向かって緩やかに下がる。

【その他施設】床面で土坑1基(SII-SK1)と性格不明遺構1基(SII-SX1)を検出した。SII-SK1は、平面形状は不整形で、規模は短軸45cm、長軸53cm、深さ18cmで、断面形状はU字形を呈する。位置関係から貯蔵穴と考えられる。堆積土は2層確認でき、1層には炭化粒、焼土を多く含んでいた。SII-SX1は、住居西側の広範囲に広がる。平面形は不整形、床面から掘り込まれている。最深で10cmの深さを確認した。堆積土は粘土を主体とし、炭化物、焼土を多く含んでいる。



面版 番号	目録 番号	出土 遺構	層位	種別	器種	測量 (cm)	外面	内面	備考	写真 図版	
						口径	底径	壁高			
1	D-9	SII	床面	土師器	坪	(16.0)	8.0	6.6	ロクロナグ一體下半：手持ちヘラケズリ 直：倒輪み切一手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色化理 胎土無着 砂粒含む	4-1
2	E-2	SII	3	單色器	坪	(12.0)	9.23	4.0	ロクロナグ一體下半：手持ちヘラケズリ 直：手持ちヘラケズリ（切削直し剥離）	ロクロナグ一體下半～ 胎土無着 砂粒含む 他成形質（色 調灰白色）	4-2
3	E-1	SII	1	單色器	坪	-	6.83	(3.0)	ロクロナグ一體下半：手持ちヘラケズリ 直：手持ちヘラケズリ（赤鉛）	ロクロナグ一體下半～ 胎土無着 砂粒含む 他成形質（色 調灰白色） 大ダメージあり	4-3

第12図 SII 竪穴住居跡出土遺物（1）

【出土遺物】住居堆積土、カマド、SK1土坑、SX1性格不明遺構、床面から須恵器、土師器が出土した。

須恵器は、全体的に出土量が少なく、図化できたものは坪2点のみである。形態は、第12図2が、体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。切り離し痕跡は明瞭に確認できない。その他、破片資料で回転ヘラ切りが確認できるものが出土している。

土師器は、今回の調査で出土した土器全体の9割を占める。第12図1の坪は、床面とSX1性格不明遺構で出土した破片が接合したものであり、床面出土の破片は被熱により黒色処理が失われている。甕は、坪に比べ出土量が多いが全体の器形を知り得るものはない。第13図1～5は、口縁部～体部にかけての資料である。口縁部が大きく外反し、端部上面が丸くおさまるもの、三角形に突き出すものが確認できる点や、ロクロ調整前に口縁部～体部にかけて平行タタキが認められる点で、第6次調査の3号住居および1号講跡から出土した土師器甕と同じ形態である。これらは第6次調査での土師器甕分類のI類にあたり、この他にも第11次、第14次調査で同形態の甕が出土している。一方で、第13図1は他の甕と比べ器形や胎土が異なる。第13図6、7は、体部下半から底部にかけての資料である。その他の遺物としては、カマドからは鉱滓が1点出土した。

(2) 溝跡

SD1溝跡（第11図）

調査区南端で確認された東西方向に延びる溝跡である。SII竪穴住居跡よりも新しい。規模は検出長477cm、上端幅105cm以上で、検出面から1.1m掘り下げた。安全面を確認して、完掘は行わなかった。堆積土は6層確認され、遺物は須恵器、土師器の甕や坪の破片が出土した。

SD2溝跡（第11図）

調査区北辺で確認された南北方向に延びる溝跡である。SII竪穴住居跡よりも古い。規模は検出長92cm、幅40cm、深さ10cmである。断面形状はU字形を呈し、堆積土は単層である。遺物は出土していない。



図版 番号	登録 番号	出土 遺構	部位	種別	基壇	法量 (cm)			外面	内面	備考	写真 版
						口径	底径	高さ				
1	D-5	SII	床	土師器	甕	(10.2)	—	(8.0)	口: ロクロナデ (体部との境に低い段を形成) 体: ロクロナデ→ラケヅリ	ロクロナデ→体下平~底: コテ状工具痕、ロコテ付着	粘土細密 石英、砂粒多量含む 小型の骨とては器壁が厚い	8-4
2	D-3	SII	床	土師器	甕	(19.0)	—	(11.2)	タキモ目→ロクロナデ	ロクロナデ	粘土細密 砂粒含む	8-6
3	D-7	SII	2	土師器	甕	(22.6)	—	(7.4)	タキモ目以前の工具痕→ロクロナデ	ロクロナデ	粘土細密 砂粒含む	8-5
4	D-6	SII	床	土師器	甕	(23.3)	—	(12.8)	ロクロナデ 体下平: ハラケヅリ	ロクロナデ	粘土細密 砂粒含む	8-7
5	D-4	SII	床面	土師器	甕	(20.8)	—	(15.4)	口: タキモ目→ロクロナデ 体上半: タタキ目→ロクロナデ→ハラケヅリ 体下半: タキモ目→ロクロナデ	ロクロナデ 体: ハラケヅリ→メム	粘土細密 砂粒含む	8-8
6	D-1	SII	床	土師器	甕	—	6.8	(3.1)	ロクロナデ(体下端) 平持ちハラケヅリ 里: 土質細密無隙	ロクロナデ		8-9
7	D-2	SII	床面	土師器	甕	—	6.2	(6.1)	ロクロナデ(体下端) 平持ちハラケヅリ 里: 土質細密無隙	ロクロナデ 工具痕	粘土細密 砂粒含む	8-10

第13図 SII 穴竪住居出土遺物（2）

5.まとめ

今回の調査地点は、南小泉遺跡のほぼ中央に位置し、遠見塚古墳から西に約340mの地点である。これまでの周辺の調査では、古墳時代、平安時代の竪穴住居跡、溝跡、土坑、中世、近世の建物跡等、幅広い年代の遺構、遺物が多く確認されている。今回の調査では、基本層II層上面で竪穴住居跡1軒、溝跡2条を検出した。

SII 竪穴住居跡から出土した遺物は、ロクロ調整の土師器などがあり、特徴から9世紀前葉から中葉の年代が考えられる。同時期の遺構として検出例は少ないが、これまでにも今回の調査地点より南側の第14次調査区、北東側の第18次調査区で、竪穴住居跡、土坑、溝跡等が確認されており、集落の存在が推定できる。また、平安時代の竪穴住居跡は、南小泉遺跡の南部に位置する第6次調査地点・第11次調査地点でも確認されており、南にかけて集落が広がっている可能性がある。

SD1溝跡は、大部分が調査区外に延びており全体の把握は不可能であった。遺構の重複関係から、9世紀以降の溝跡と考えられるが、詳細な時期については不明である。周辺でも同規模で、東西方向に延びる溝跡が確認されていることから、何らかの区画を示す溝跡であったと考えられる。

参考文献

- 仙台市教育委員会 1983 『南小泉遺跡－青葉女子学園移転新宮工寺地内調査報告一』仙台市文化財調査報告書第55集（南小泉遺跡第6次調査）
仙台市教育委員会 1984 『南小泉遺跡 都市計画街路建設工事関係第3次調査報告』仙台市文化財調査報告書第68集（南小泉遺跡第11次調査）
仙台市教育委員会 1987 『南小泉遺跡 第14次調査発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告第109集（南小泉遺跡第14次調査）
仙台市教育委員会 1990 『南小泉遺跡 第16～18次調査発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告第140集（南小泉遺跡第18次調査）



1. SII 竪穴住居跡床面検出状況（南東から）



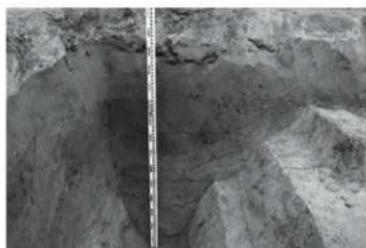
2. SII 竪穴住居跡カマド土層断面（西から）



3. SII 竪穴住居跡 SKI 土層断面（南から）

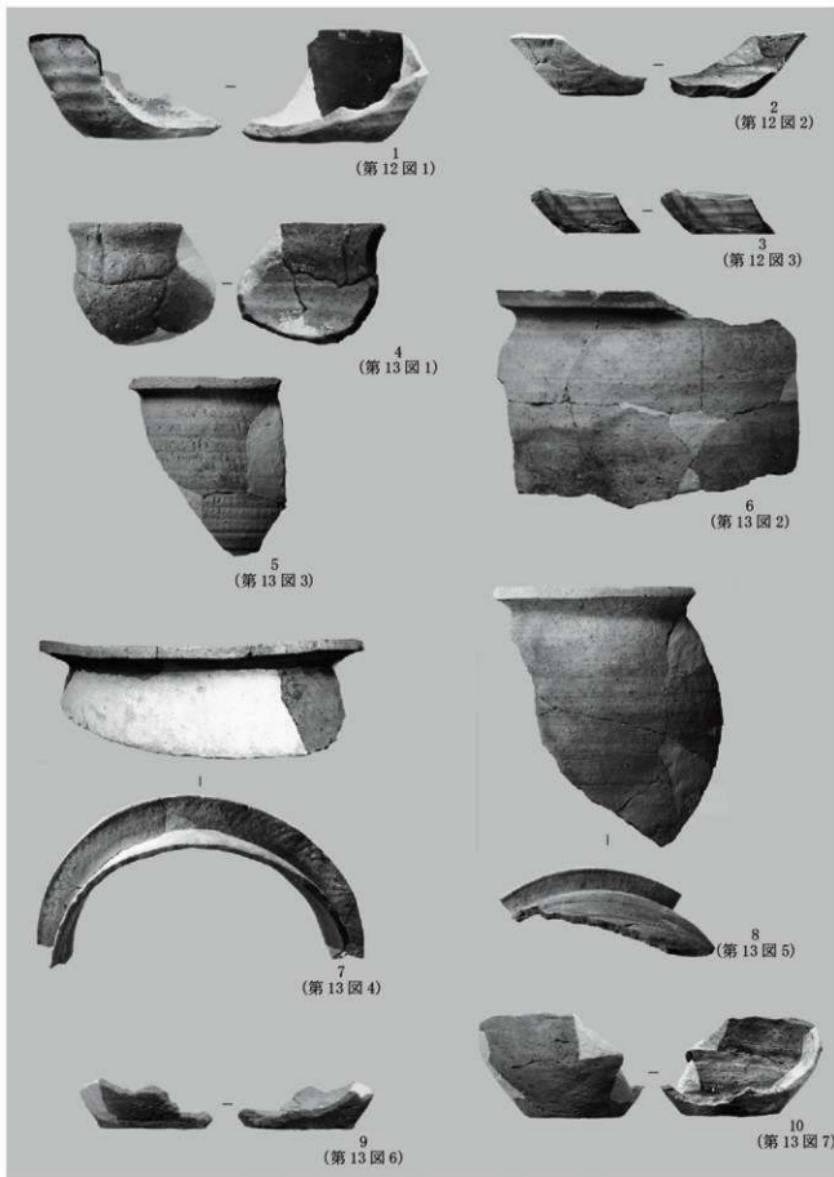


4. SII 竪穴住居跡掘方土層断面（西から）



5. SD1 溝跡土層断面（東から）

写真図版3 南小泉遺跡第84次調査



写真図版4 南小泉遺跡第84次調査出土遺物

第3節 第85次調査

1. 調査要項

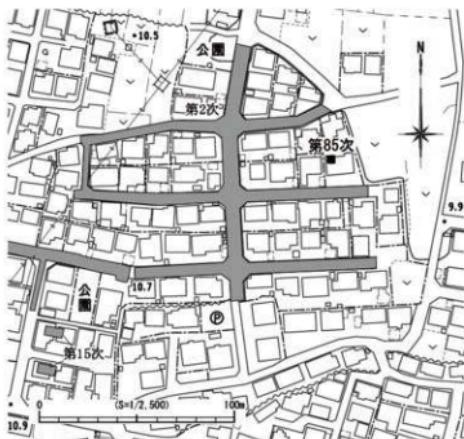
遺跡名 南小泉遺跡（宮城県遺跡登録番号01021）
 調査地点 仙台市若林区遠見塚二丁目 222番 19、65
 調査期間 平成30年10月4日
 調査対象面積 64.40 m²
 調査面積 約14.4 m²
 調査原因 個人住宅建築工事
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
 担当職員 主事 小林航 文化財教諭 栗和田祥郎

2. 調査に至る経過と調査方法

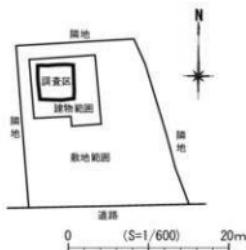
今回の調査は、申請者より平成30年8月20日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成30年8月22日付H30教文第102-238号で通知）に基づき実施した。

調査区は建築範囲内に東西4m、南北4mの規模で設定し、重機により盛土およびI～III層を除去した。IV層上面（GL-1.2m）で遺構検出作業を行ったが、遺構は確認できなかった。

今回の調査では調査区平面図（S=1/40）、調査区西壁断面柱状略図（S=1/20）を作製し、記録写真の撮影はデジタルカメラにて行った。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。



第14図 第85次調査区位置図



第15図 第85次調査区配置図

3. 基本層序

今回の調査では、盛土（層厚75cm）の下で、基本層を4層確認した。

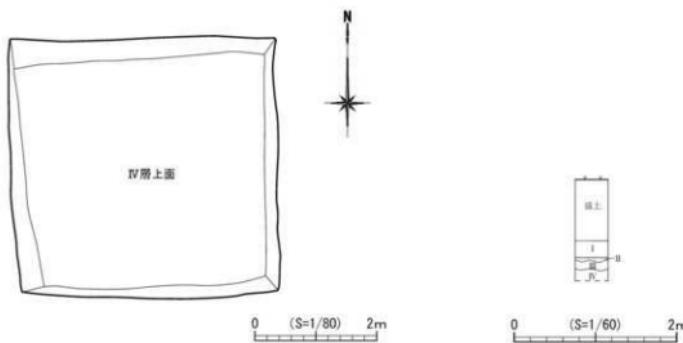
- I 層：2.5Y3/2 黒褐色を呈する粘土。粘性・しまりがやや強い。層厚 22cm。
- II 層：5Y3/2 オリーブ黒色を呈する粘土。粘性が強い。斑状にグライ化し、また酸化鉄を斑状に含む。層厚 3cm。
- III 層：10YR2/1 黒色を呈する粘土。しまりがやや強い。酸化鉄を細かい粒状に含む。層厚 5～10cm。
- IV 層：10YR4/4 暗褐色を呈する粘土質シルト。しまりが強い。全体的にグライ化しており、掘削直後は 5Y4/1 灰色を呈する。

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、遺構は確認できなかった。遺物はIV層上面で縄文土器が5点出土している（第17図）。1はラッパ状に外反する口縁部片。外面はミガキが施され、縄文は施文されない。2～4は地文に縄文をもつ体部片で、2、3は体部上位で屈曲をもつ器形である。4、5は体部下半である。これらは胎土、色調が共通することから同一個体であると考えられる。

5.まとめ

調査では遺構は確認できなかったが、縄文土器が5点出土した。南小泉遺跡ではこれまでに縄文時代の遺構は確



第16図 第85次調査区平面・西壁断面柱状図



図版 番号	書類 番号	出土 遺構	層位	種別	基壇	法量(cm)			外面	内面	備考	写真 図版
						口径	底径	高さ				
1	A-1	基本層	IV	縄文土器	深鉢	-	-	(4.0)	ミガキ	ミガキ	胎土網目 砂粒多量含む 口縁部片	5-1
2	A-2	基本層	IV	縄文土器	深鉢	-	-	(5.1)	1.8縄文	ミガキ	胎土網目 砂粒多量含む 体部片	5-2
3	A-5	基本層	IV	縄文土器	深鉢	-	-	(2.8)	縄文	ミガキ	胎土網目 砂粒多量含む 体部片	5-3
4	A-1	基本層	IV	縄文土器	深鉢	-	-	(3.2)	1.8縄文	ミガキ	胎土網目 砂粒多量含む 体部片	5-4
5	A-3	基本層	IV	縄文土器	深鉢	-	-	(2.9)	1.8縄文	ミガキ	胎土網目 砂粒多量含む 体部片	5-5

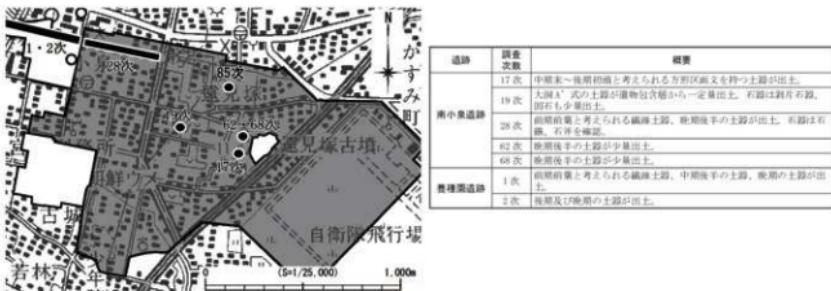
第17図 第85次調査出土遺物

認されておらず、遺物の出土が報告されている調査は第17、19、28、62、68次調査である。遺物の時期は中期末葉～後期初頭、晩期後半であり、出土状況は散在的である。しかし、第19次調査では、包含層を確認しており、一定量の土器が出土している。また、遺跡西側に隣接する養種園遺跡でも南小泉遺跡と同様の時期の土器が出土しているが、出土数は少ない。地点では第28次調査を除き、その他の調査は遺跡中央部であり、今回の調査区も中央部から北寄りの地点である（第18図）。

今回の調査で出土した土器は同一個体と考えられ、口縁部に地文を持たず、体部に屈曲を持つといった特徴からおおよそ縄文時代中期～後期にかけての時期と考えられるが、詳細は不明である。南小泉周辺では縄文時代の遺物は出土例が少ないが、今回の調査によって遺跡北部においても遺物の拡がりを確認できた。

参考文献

- 仙台市教育委員会 2009 『養種園遺跡第2次 保春院前遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第344集
仙台市教育委員会 2014 『南小泉遺跡第68次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第420集



第18図 南小泉遺跡・養種園遺跡 縄文土器出土地点



1. 調査区全景（西から）



2. 調査区西壁土層断面（東から）



写真図版5 南小泉遺跡第85次調査・出土遺物

第4節 第86次調査

1. 調査要項

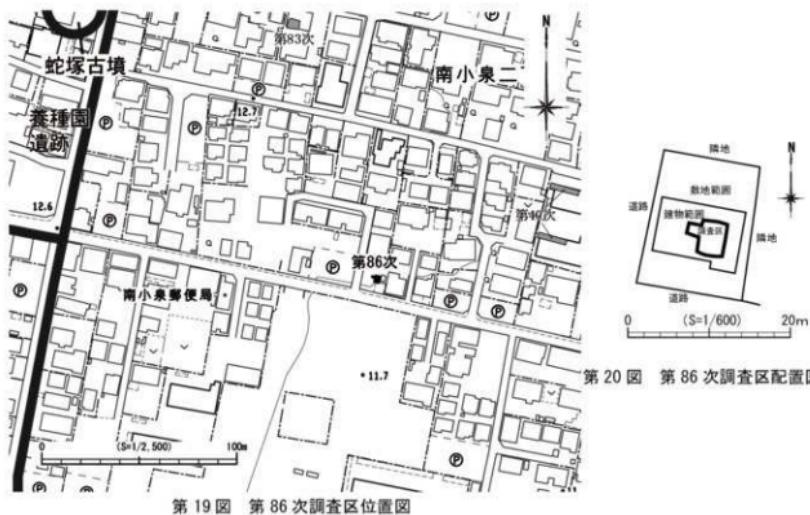
遺跡名	南小泉遺跡（宮城県遺跡登録番号01021）
調査地点	仙台市若林区南小泉二丁目62番2、62番3
調査期間	平成31年4月8日～10日
調査対象面積	64.40 m ²
調査面積	12.13 m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主事 妹尾一樹 相川ひとみ 文化財教諭 元山祐一

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成30年12月21日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成30年12月27日付H30教文第102-494号で通知）に基づき実施した。

調査では対象地に東西3m、南北4mの調査区を設定した。重機により盛土および基本層Ⅰ～Ⅱ層を除去後、Ⅲ層上面（GL-0.6m）で遺構検出作業を行い、竪穴遺構1基、土坑5基を確認した。その後、竪穴遺構の規模確認のため、調査区西側を1m×1.5mの範囲で拡張した。

必要に応じて、平面図（S=1/20）および断面図（S=1/20）を作製し、記録写真はデジタルカメラにより撮影した。調査終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。



3. 基本層序

厚さ0.2mの碎石層の下に基本層を3層確認した。遺構確認はIII層上面(GL-0.5~0.6m)で行った。

I 層：10YR3/4暗褐色シルト。炭化物粒を少量含む。旧表土で耕作土と考えられる。

層厚30~52cm。

II 層：10YR4/4褐色シルト。炭化物粒を少量含み、部分的に酸化鉄が集積する。

旧耕作土と考えられる。層厚15~30cm。

III 層：10YR7/6明黄褐色粘土。酸化鉄を斑状に含む。今回の遺構確認面である。

4. 発見遺構と出土遺物

(1) 壺穴遺構

S11 壺穴遺構（第21図）

本遺構では、カマドや柱穴等の住居内施設が確認されず、底面に凹凸があり平坦でないため、住居跡と判断できず、壺穴遺構とした。

【位置】調査区南部で確認した。

【重複関係】SK1、SK2土坑と重複関係にあり、本遺構が古い。

【規模・平面形】東西約3.8m、南北約2.3mの長方形形状を呈し、深さは20~24cmである。

【堆積土】1層確認した。

【壁面】やや外傾して立ち上がる。

【その他の施設】底面でピット2基を検出した。規模は径20~30cm、深さ20cmである。柱痕跡は確認されなかった。

【出土遺物】非クロクロ調整の土師器、須恵器、平瓦が出土した。そのうち非クロクロ調整の土師器（写真図版6-1）と平瓦（写真図版6-2）を掲載した。1は丸底の壺の体部片で内面調整はヘラミガキが施され、器表面は黒色化している。胎土は緻密で砂粒をほとんど含まず、色調は明橙色を呈する。いわゆる「関東系土器」である。2は凹面に布目、凸面に繩叩き目が認められる平瓦の破片である。側面および端面が残っていないため、大きさなど詳細については不明である。

(2) 土坑

SK1 土坑（第21図）

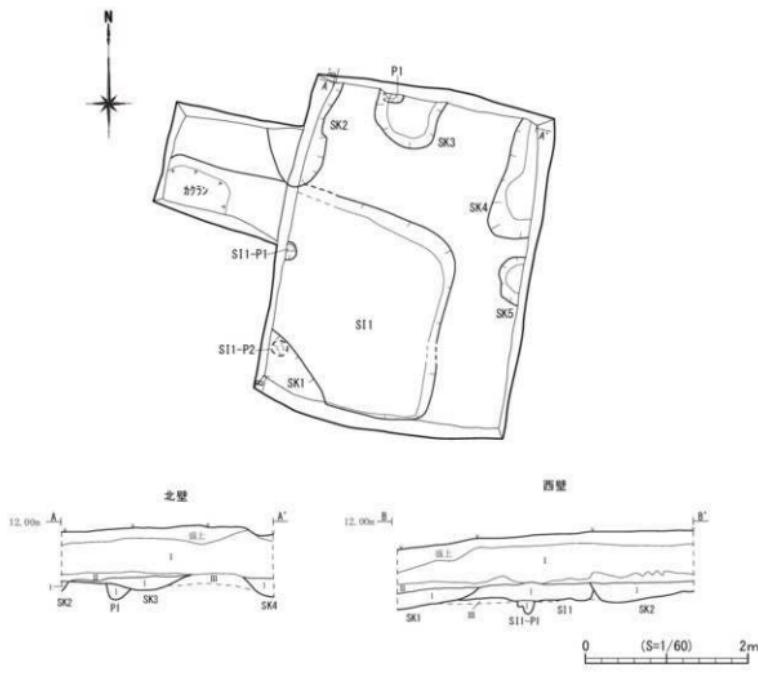
調査区南西部で確認した。S11壺穴遺構よりも新しい。部分的な検出のため平面形は不明である。規模は東西80cm以上、南北60cm以上で、調査区外に広がる。深さ20cmまで掘り下げたところ壁面に到達したため下端は確認していない。堆積土は単層である。遺物は近世の磁器が出土している。

SK2 土坑（第21図）

調査区北西部で確認した。S11壺穴遺構よりも新しい。部分的な検出のため平面形は不明である。規模等詳細は不明である。検出部で東西75cm以上、南北140cm以上で、深さ24cmまで掘り下げたところ壁面に到達したため下端は確認していない。堆積土は単層である。遺物は近世の磁器が出土している。

SK3 土坑（第21図）

調査区北部で確認した。P1よりも新しい。部分的な検出のため平面形は不明である。規模は東西83cm、南北62cm以上で、深さは18cm。堆積土は単層である。遺物は近世の磁器が出土している。



第21図 第86次調査区平面・断面図

第3表 第86次調査出土遺物観察表

遺物 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	基準	法量(cm)			外観	内面	備考	写真 図版
						口径	底径	厚さ				
-	C-1	S11	I	土師器	片	-	-	-	手持ちヘラケツリ	ココナデ～ラミガ 粘土無色 砂粒をほんどう含まない 中・薄色仕上げ的理	明治三十器 等高面鏡のみ	6-1

遺物 番号	登録 番号	出土 遺構	層位	種別	基準	法量(cm)			備考	写真 図版
						長さ	幅	厚さ		
-	G-1	S11	I	瓦	平瓦	-	-	-	界面：布目 内面：溝印き目 粘土無色 砂粒を含む 等高面鏡のみ	6-2

SK4 土坑（第21図）

調査区北東部で確認した。部分的な検出のため平面形、規模等詳細は不明である。規模は東西 53 cm以上、南北 147 cm以上で、深さは 25cm である。堆積土は単層である。遺物は近世の磁器が出土している。

SK5 土坑（第21図）

調査区東側で確認した。部分的な検出のため平面形は不明である。規模は東西 28 cm以上、南北 62 cmで、深さは 15 cmと浅い。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

(3) ピット（第21図）

調査区北側で 1 基確認した。SK3 土坑よりも古い。直径約 20cm、深さ 15cm で上部は SK3 土坑により削平される。また、遺物は出土していない。

5.まとめ

今回の調査地点は、南小泉遺跡の西部に位置し、竪穴遺構 1 基、土坑 5 基、ピット 1 基を検出した。遺物は S11 竪穴遺構から非ロクロ土器、平瓦、SK1～4 土坑からそれぞれ近世の磁器が出土した。

S11 竪穴遺構からは「関東系土器」が出土した。本調査区の南東約 300m に位置する第22次調査（仙台市教育委員会 1994）や、南西約 200m に位置する第31次調査（仙台市教育委員会 1998）では同様の土器がまとめて出土している。特に第22次調査では、幅 7m の大溝によって区画される居住域が西方に広がることが確認されており、遺跡西部において「関東系土器」が出土する集落が広がっていることが指摘されている。今回の調査では当該期の遺構は確認されず、遺物の出土量も僅かであるものの、調査区周辺においても「関東系土器」が出土する地点であつた可能性が考えられる。

遺構は S11 竪穴遺構からは平瓦が出土することから古代以降、SK1～4 土坑からは近世の磁器が出土することから近世頃と考えられる。また、SK5 土坑からは遺物が出土していないものの、堆積土が SK1～4 土坑と似通うことから同時期のものと推定される。

参考文献

- 仙台市教育委員会 1994 『南小泉遺跡 第22次・23次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第192集
仙台市教育委員会 1998 『南小泉遺跡 第30・31次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第226集



1. 造構完掘状況（南東から）



2. SI1 堅穴造構土層断面（東から）



3. 調査区西壁土層断面（東から）



4. 拡張時 SI1 堅穴造構検出状況（東から）



1
(第3表)

2
(第3表)

写真図版6 南小泉遺跡第86次調査・出土遺物

第4章 富沢館跡の調査

第1節 遺跡の概要

富沢館跡は仙台市太白区富沢字館、熊野前に所在する。仙台市の南部、地下鉄南北線富沢駅から西へ約700mに位置し、名取川の支流の笊川によって形成された自然堤防上に立地する。現況での標高は約14～18mである。

富沢館跡はこれまでに7次にわたる調査が行われており、縄文時代・古代・中世の時期の遺構、遺物が発見されている。

縄文時代では後期中葉の宝ヶ峯式の時期を主体として竪穴住居跡などの遺構が確認されており、縄文土器のほか土偶やスタンプ形土製品なども出土している。

古代では炉跡を伴う竪穴遺構が複数確認されている。これらの時期は9世紀から10世紀と推定され、鉄漬が多数出土した竪穴遺構もあることから鍛冶関連の遺構であると考えられている。また同様の遺構は隣接する鍛冶屋敷A遺跡、鍛冶屋敷前遺跡などでも確認されており、鍛冶屋敷A遺跡からは「謹解 申請稻事 合口口」「大田部」などと刻書された砥石が出土している。(仙台市教育委員会 2018)

中世になるとこの地域は国人領主栗野氏の支配下となり、城館が造営される。この館の詳細な造営時期や造営者は不明だが、入生田家に残る『入生田家之故実』と『館記』においては北目城主であった栗野大膳の造営によるものとされ、地域の伝承では栗野氏臣の富沢伊賀守が居城したと伝わる。

平成25年度から始まった土地区画整理事業に伴い、館跡の様相の大部分は変化したが、中心部分の土塁は現在も保存され、その姿を残している。発掘調査により館跡の周囲には1～4条に渡る堀跡が巡らされていたことが判明した。また主郭部の東側には出入り口に位置したと考えられる門跡が検出され、また南西側では土塁が筋違いに配置されていることが確認され、虎口を形成していたものと考えられている。また2基の火葬遺構が検出され、骨片のほか古錢などが出土した。(仙台市教育委員会 2018)

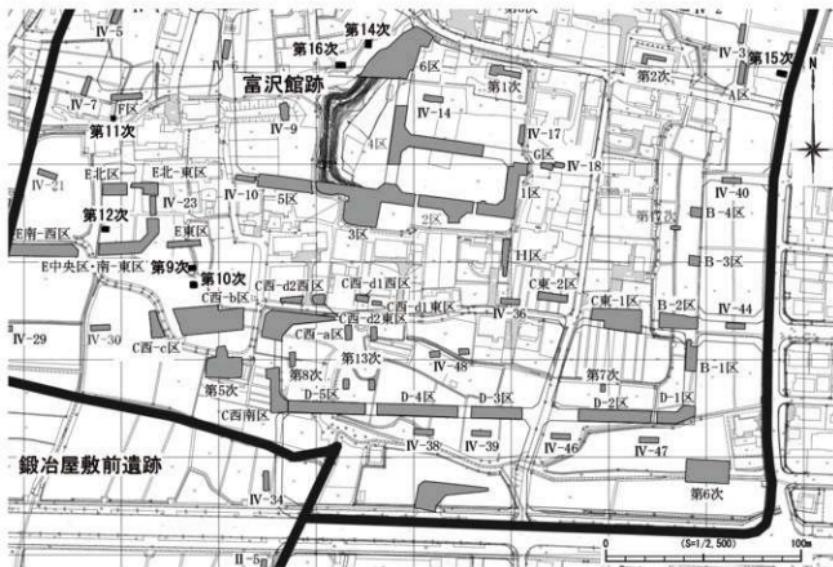
近世になると入生田家の在郷屋敷となり、『館記』には仙台藩二代藩主伊達忠宗の時、堀や土塁があつては城や要害のようで誤解を招くとのことから、土塁を崩し、堀を埋めたとの記述がある。その後は一部の土塁を残して、この地を畠や水田として利用していたと考えられる。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢館跡	堀跡跡、施設跡	自然堤防	縄文、平安～古墳
2	前の堀跡曲輪跡	堀跡跡	自然堤防	縄文、奈良～中世
3	前の堀跡A運跡	堀跡跡	自然堤防	縄文、古代～中世
4	古堀跡	堀跡跡	丘陵	平安
5	川原遺跡	施設跡	自然堤防	縄文期、古代
6	川原遺跡	堀跡跡	自然堤防	縄文期
7	前の堀跡B運跡	堀跡跡	自然堤防、後背堤防	縄文、古代～近世
8	八木本遺跡	堀跡跡	自然堤防	古代～平安
9	京ノ牛遺跡	堀跡跡	自然堤防	平安
10	上野遺跡	堀跡跡	丘陵	縄文、古代～平安
11	山口遺跡	施設跡、本田跡、柱跡跡	自然堤防、後背堤防	縄文～近世
12	富沢遺跡	本田跡、泡合跡	後背堤防	古石器～近世
13	下ノ内遺跡	施設跡、墓、罐	自然堤防	縄文、弥生、奈良～近世
14	伊豆田B遺跡	御跡	自然堤防	古墳～平安
15	伊古田遺跡	施設跡	自然堤防	古墳、古墳、奈良、平安
16	六反田遺跡	施設跡、小堀、御跡	自然堤防	縄文～古墳、平安～近世
17	有ノ内遺跡	施設跡	自然堤防	弥生、平安

第22図 富沢館跡と周辺の遺跡

第2節 第9次調査

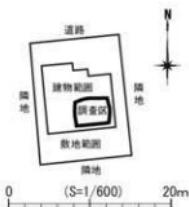


第23図 富沢館跡調査区位置図

第2節 第9次調査

1. 調査要項

遺 跡 名 富沢館跡（宮城県遺跡登録番号 01246）
 調 査 地 点 仙台市太白区富沢字館 13- 1、14- 1、14- 2、
 15、21 の各一部
 調 査 期 間 平成 31 年 1 月 8 日～10 日
 調査対象面積 61.43 m²
 調 査 面 積 約 12.0 m²
 調 査 原 因 個人住宅建築工事
 調 査 主 体 仙台市教育委員会
 調 査 原 因 仙台市教育局生涯学習部
 文化財課調査調整係
 担 当 職 員 主任 及川謙作 文化財教諭 尾形隆寛

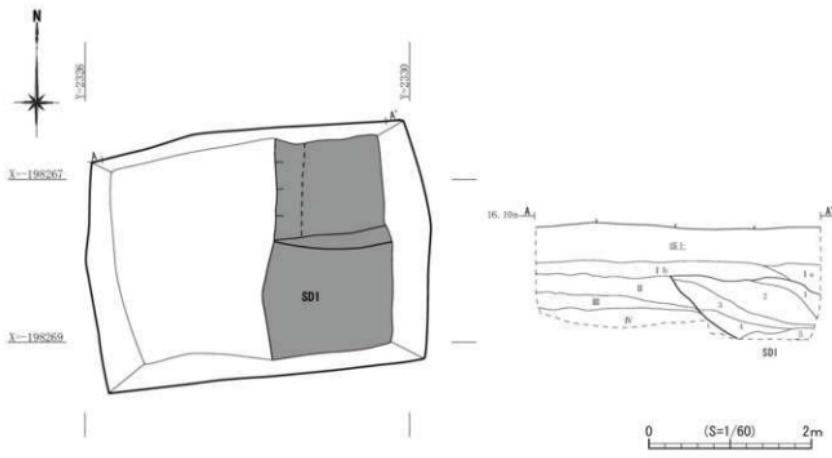


第24図 第9次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より平成 30 年 12 月 4 日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成 30 年 12 月 10 日付 H30 教文第 102-445 号で通知）に基づき実施した。

調査区は建築予定範囲内に南北 3m、東西 4m の規模で設定し、重機により盛土および I～III 層を除去した時



第25図 第9次調査区平面・断面図

点で遺構検出作業を行ない、その結果、南北方向の溝跡が検出された。溝跡の一部を掘削して断面の観察を行った。

今回の調査では調査区平面図 ($S = 1/40$)、調査区北壁断面図 ($S = 1/20$) を作製し、記録写真的撮影はデジタルカメラにて行った。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

今回の調査では、盛土（層厚45cm）の下で、基本層を大別4層、細別で5層確認した。遺構検出面であるII層上面までの深さは0.6mである。

I a層：10YR3/4暗褐色のシルト。礫を斑状に含む。層厚は0～36cmで、土地区画整理直前の水田耕作層か

盛土の一部の可能性がある。

I b層：2.5Y3/2黒褐色のシルト。ややグライ化している。白色砂を斑状に含む。層厚0～20cmで、土地区画整理直前の水田耕作層である。

II 層：10YR4/4褐色のシルト。酸化鉄粒（ $\phi 2\text{mm}$ ）が下層との境に堆積している。層厚は22～40cmである。

III 層：10YR4/4褐色のシルト。酸化鉄粒が下層との境に堆積している。層厚22～40cmである。

IV 層：10YR3/4暗褐色のシルト。明黄褐色の凝灰岩礫（ $\phi 2\text{cm}$ ）を斑状に含む。層厚は25cm以上である。

富沢駅西土地区画整理事業に伴う調査の基本層IV層に相当し、縄文時代後期の遺物包含層の可能性が高い。

第2節 第9次調査

4. 発見遺構と出土遺物

SD1溝跡（第25図）

調査区東半で確認した南北方向の溝跡である。規模は幅1.6m以上、長さ2.7m以上である。約40cm掘り下げたが、安全面を考慮し、完掘は行わなかった。堆積土は5層に分層されたが、最上層の1層は基本層I・b層と同一の層の可能性がある。断面形状は不明であるが、壁面の傾斜は約45°である。遺物は土師器片が少量出土した。

5.まとめ

今回の調査地点は、富沢館跡の西端に位置する。調査地点の南と北に隣接する道路範囲では、土地区画整理に伴い本発掘調査が行われている（第4次調査 C西-b区 SD43堀跡、E東区 SD77堀跡）。今回の調査で確認された溝跡は、検出位置および断面形状も類似することから両調査区で確認されている同一の堀跡であると考えられ、その延長部分に当たる。また、今回の調査地点は他の調査区と比べ盛土が薄く、基本層も約80cm以上高い位置で検出されており、本来は、旧地形が高かったものと考えられる。

参考文献

仙台市史編さん委員会 2006 『仙台市史 特別編7 城館』

仙台市史編さん委員会 2014 『仙台市史 特別編9 地域誌』

仙台市教育委員会 2004 『保春院前遺跡他』仙台市文化財調査報告書第274集（富沢館跡第2次）

仙台市教育委員会 2018 『鍛治屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか－仙台市富沢駅西地区画整理事業遺跡発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第466集（富沢館跡第4次）

仙台市教育委員会 2019 『今市遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第476集（富沢館跡第5・6次）



1. SD1溝跡検出状況（南から）



2. SD1溝跡土層断面（南から）

写真図版7 富沢館跡第9次調査

第3節 第10次調査

1. 調査要項

遺跡名	富沢館跡（宮城県遺跡登録番号 01246）
調査地点	仙台市太白区富沢字館14-2、21の各一部
調査期間	平成31年1月8日～10日
調査対象面積	66.78 m ²
調査面積	約12.0 m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査原因	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主任 及川謙作 文化財教諭 尾形隆寛



第26図 第10次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より平成30年12月4日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成30年12月10日付H30教生文第102-448号で通知）に基づき実施した。

調査区は建築予定範囲内に南北3m、東西4mの規模で設定し、重機により盛土およびI層を除去し、II層上面で遺構検出作業を行った。その結果、南北方向のSD1溝跡が検出された。溝跡の一部を掘削して断面の観察を行った。掘削深度の関係から溝跡の完掘は行わなかった。

今回の調査では調査区平面図（S=1/40）、調査区南壁土層断面図（S=1/20）を作製し、記録写真の撮影はデジタルカメラにて行った。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

今回の調査では、盛土（層厚1.2m）の下で、基本層を大別2層、細別4層確認した。遺構検出面であるII層上面までの深さは約1.3mである。

- I a層：2.5Y3/2 黒褐色の粘土質シルト。グライ化している。層厚は約10～20cmで、土地区画整理直前の水田耕作層である。第9次調査のI a層と同一の層であると考えられる。検出範囲は部分的で、堀跡の範囲に落ち込んだ状態で検出されている。
- I b層：2.5Y3/2 オリーブ褐色の粘土質シルト。グライ化している。層厚は約10cmで、土地区画整理前の水田耕作層である。検出範囲は部分的で、堀跡の範囲に落ち込んだ状態で検出されている。
- I c層：2.5Y3/2 黒褐色のシルト。グライ化している。白色砂を斑状に含む。層厚は約10～20cmで、土地区画整理前の水田耕作層である。第9次調査のI b層と同一の層と考えられる。
- II層：10YR4/4 褐色のシルト。酸化鉄粒が下層との境に堆積している。層厚は約25cmである。古代以降の遺構検出面であるものと考えられる。

4. 発見遺構と出土遺物

S01溝跡（第27図）

幅2.5m以上、長さ2.6m以上、深さ20cm以上の南北方向の溝跡である。遺構検出面から調査区南壁付近を約20cm掘り下げたが、安全面を考慮し、完堀は行わなかった。堆積土はオリーブ褐色のシルト層が確認された。遺物は

第3節 第10次調査

出土していない。

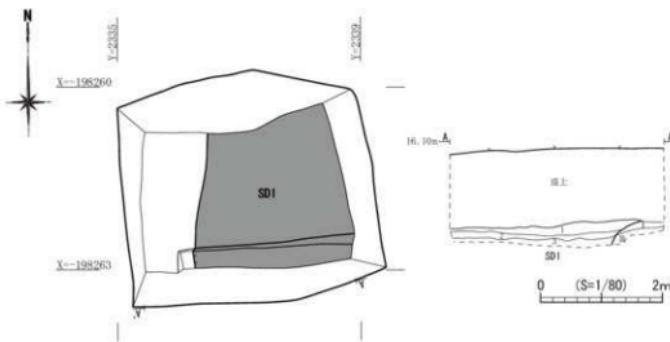
5.まとめ

今回の調査地点は、富沢館跡の西端に位置する。調査地点の南と北に隣接する道路範囲は、土地区画整理に伴い本発掘調査が行われている（第4次調査 C西-b区 SD43 堀跡、E東区 SD77 堀跡）。また第9次調査区も北側に接している。今回の調査では、各調査区から確認された堀跡の延長部分が検出された。検出位置から同一の堀跡と推定される。

参考文献

仙台市史編さん委員会 2006 『仙台市史 特別編7 城館』

仙台市教育委員会 2018 『鍛冶屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか—仙台市富沢駅西土地区画整理事業遺跡発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第466集（富沢館跡第4次）



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物	
				第9次調査の1a層に相当か? グライ化。	
SD1	1 2.0/3/2 黒褐色	粘土質シルト			
	2 2.0/3/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	グライ化。		
	3 2.0/4/1 オリーブ褐色	シルト	オリーブ褐色。黒褐色が互層状に堆積。グライ化。		

第27図 第10次調査区平面・断面図



1. SD1 溝跡検出状況（東から）



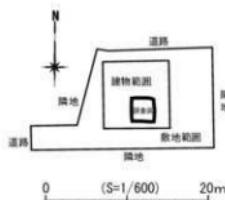
2. 調査区南壁断面（北から）

写真図版8 富沢館跡第10次調査

第4節 第11次調査

1. 調査要項

遺跡名	富沢館跡（宮城県遺跡登録番号 01246）
調査地点	仙台市太白区富沢字館8-2、9-3、108、111-6、112、水の各一部
調査期間	平成31年1月17日
調査対象面積	73.94 m ²
調査面積	約8.12 m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査原因	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主任 及川謙作 文化財教諭 尾形隆寛



第28図 第11次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より平成30年11月26日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成30年11月29日付H30教生文第102-421号で通知）に基づき実施した。

調査区は建築予定範囲内に南北3m、東西4mの規模で設定したが、盛土が厚かったため東西を3mに縮小した。重機により盛土およびI層を除去した時点で遺構検出作業を行い、その結果、南北方向のSD1溝跡が検出された。溝跡の一部を掘削して断面の観察を行った。安全面を考慮して溝跡の完掘は行わなかった。

今回の調査では調査区平面図（S=1/40）、調査区北壁断面図（S=1/20）を作製し、記録写真的撮影はデジタルカメラにて行った。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

今回の調査では、盛土（層厚85～125cm）の下で、基本層を3層確認した。遺構検出面であるII層上面までの深さは約1.25mである。

- I 層：2.5Y3/2 黒褐色のシルト。草木根を含む。層厚は約0～40cmで、土地区画整理直前の水田耕作層か盛土の一部の可能性がある。
- II 層：10YR3/4 暗褐色の粘土質シルト。酸化鉄ブロックを斑状に含む。層厚は約16cmである。
- III 層：10YR4/4 暗褐色の粘土質シルト。酸化鉄粒を斑状に含む。

4. 発見遺構と出土遺物

SD1溝跡（第29図）

幅1.8m以上、長さ2.1m以上、深さ20cm以上の南北方向の溝跡である。遺構検出面から約20cm掘り下げたが、安全面を考慮し、完掘は行わなかった。堆積土は黒褐色のシルト層が確認されたが、堆積土中にはビニール片が混入しており、比較的最近堆積した層であると考えられる。遺物は出土していない。

5.まとめ

今回の調査地点は、富沢館跡の西北端に位置する。調査地点の北に隣接する道路範囲では、土地区画整理に伴い

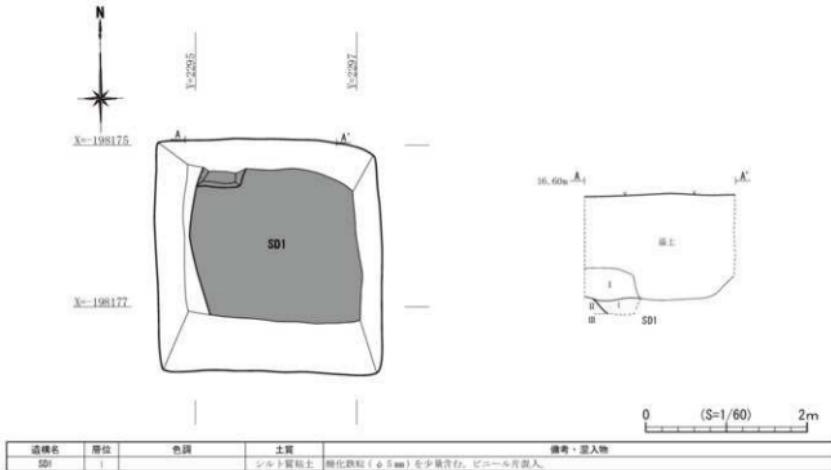
第4節 第11次調査

本発掘調査が行われている（第4次調査 F区）。SD1溝跡は、第4次調査F区で確認されたSD88堀跡の延長部分と推定される。

参考文献

仙台市史編さん委員会 2006 『仙台市史 特別編7 城館』

仙台市教育委員会 2018 『鍛冶屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか—仙台市富沢駅西土地区画整理事業遺跡発掘調査報告書一』仙台市文化財調査報告書第466集（富沢館跡第4次）



第29図 第11次調査区平面・断面図



1. SD1溝跡検出状況（北東から）



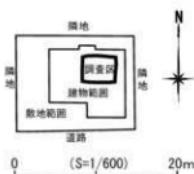
2. 調査区北壁断面（南から）

写真図版9 富沢館跡第11次調査

第5節 第12次調査

1. 調査要項

遺跡名	富沢館跡（宮城県遺跡登録番号 01246）
調査地点	仙台市太白区富沢駅西土地区画整理事業地内 23B-55L
調査期間	平成31年1月15日
調査対象面積	67.07 m ²
調査面積	約12.0 m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査原因	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主事 小林 航 文化財教諭 尾形隆寛



第30図 第12次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より平成30年11月26日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成30年11月29日付H30教生文第102-424号で通知）に基づき実施した。

調査区は建築予定範囲内に南北3m、東西4mの規模で設定し、重機により盛土およびI層とその下層を除去した時点（SD1溝跡2層上面）で遺構検出作業を行ったが、遺構のラインが確認できなかつたため、調査区北辺で人力および重機によりサブトレレンチを設定、掘削して断面観察を行つた。その結果、溝跡の落ち込みが確認され、調査区の大部分が溝跡の堆積土であることを確認した。なお、安全面を考慮して完掘は行わなかつた。

今回の調査では調査区平面図（S=1/40）、調査区北壁断面図（S=1/20）を作製し、記録写真的撮影はデジタルカメラにて行った。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

今回の調査では、盛土（層厚80～90cm）の下で、基本層を2層確認した。遺構検出面までの深さは約1.05mである。

I 層：10YR4/1褐色灰色のシルト。層厚は約10～20cmで、土地区画整理前の水田耕作土層である。

II 層：10YR3/3暗褐色の粘土質シルト。10YR4/2灰黄褐色粘土を少量含み、酸化鉄、焼土粒をごく少量含む。

4. 発見遺構と出土遺物

SD1溝跡（第31図）

幅3.5m以上、長さ2.5m以上、深さ0.5m以上の南北方向の溝跡である。堆積土は2層に細分され、土質などの特徴から南側に隣接するE南-東区SD49堀跡の堆積土（1・3層）それぞれに対応すると考えられる。安全面を考慮し、完掘は行わなかつた。遺物は土師器片が少量出土した。

5. まとめ

今回の調査地点は、富沢館跡の西端に位置する。調査地点の南と北側の道路範囲では、土地区画整理に本発掘調査が行われている（第4次調査E南-東区SD49堀跡、E北区SD46堀跡）。今回の調査で、E南-東区とE北区で確認された堀跡の延長が検出され、調査区は堀跡の中に位置することが判明した。この結果から当該地点の堀跡は、

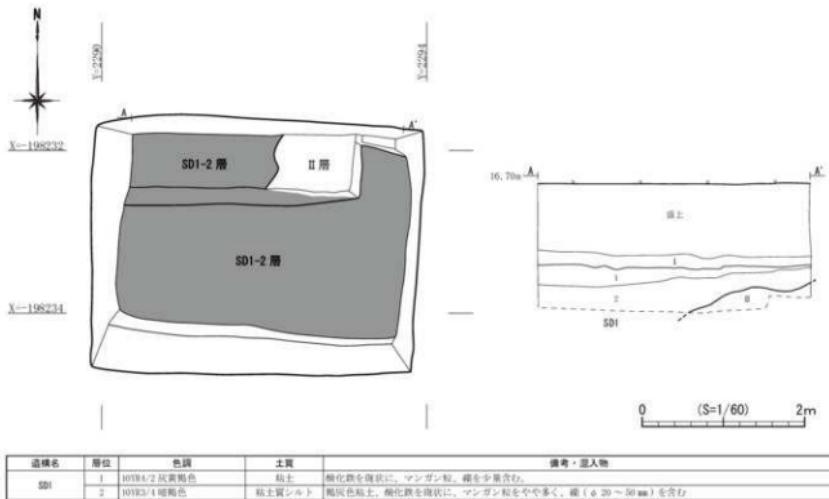
第5節 第12次調査

想定範囲よりもやや東側に湾曲しているものと推測される。

参考文献

仙台市史編さん委員会 2006 『仙台市史 特別編7 城館』

仙台市教育委員会 2018 『鍛冶屋敷A遺跡・富沢館跡・川前遺跡ほか—仙台市富沢駅西地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書一』 仙台市文化財報告書第466集



第31図 第12次調査区平面・断面図



1. SDI溝跡検出状況（東から）



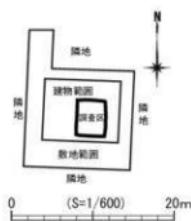
2. 調査区北壁断面（南東から）

写真図版10 富沢館跡第12次調査

第6節 第14次調査

1. 調査要項

遺跡名	富沢館跡（宮城県遺跡登録番号 01246）
調査地点	仙台市太白区富沢駅西土地区画整理事業地内 29街区 56 画地
調査期間	令和元年6月19日～20日
調査対象面積	66.24 m ²
調査面積	約12 m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査原因	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担当職員	主事 妹尾一樹 文化財教諭 元山祐一



第32図 第14次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、令和元年6月10日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和元年6月11日付H31教生文第101-90号で通知）に基づき実施した。

調査区は建築予定範囲内に南北4m、東西3mの規模で設定し、重機により盛土およびI層を除去した。II層上面（GL-1.3m）で遺構検出作業を行ったところ、溝跡1条を確認した。なお、建築物の予定掘削深度の関係から溝跡の完掘は行わなかった。

調査では調査区平面図（S=1/40）および断面図（S=1/20）を作製し、記録写真はデジタルカメラにて行った。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

今回の調査では盛土（層厚110cm）の下で、基本層を大別3層、細別4層確認した。遺構検出面であるII層上面までの深さは1.3mである。

- I 層：10YR5/2 灰黄褐色シルト。炭化物、小礫を含む。区画整理以前の旧表土と考えられる。層厚約25cm。
- II a層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。砂を少量含み、酸化鉄を多量に含む。西側にて部分的に認められた。
- II b層：10YR5/6 黄褐色シルト。砂を少量含む。層厚36～40cm。今回の遺構検出面である。
- III 層：10YR4/4 暗褐色の粘土質シルト。砂と酸化鉄を少量含む。層厚34cm以上。

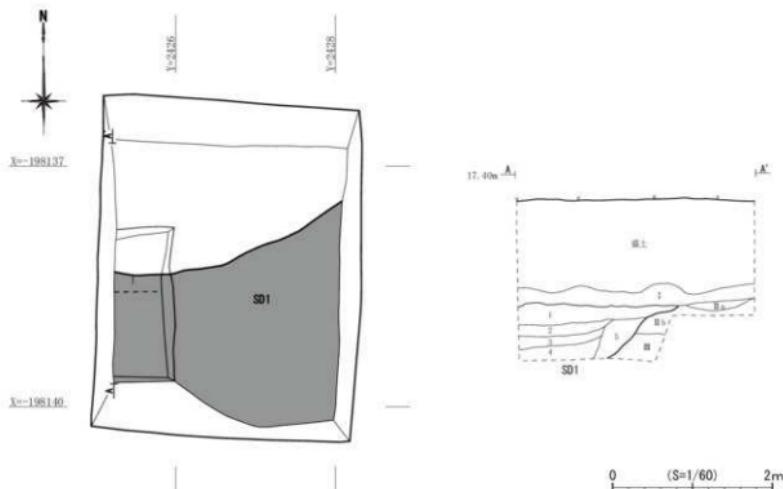
4. 発見遺構と出土遺物

SD1溝跡（第33図）

調査区南半で確認した北東から南西方向の溝跡で、その両端は調査区外へと延びる。規模は検出長3.2m、幅2.6m以上、深さ0.7m以上である。予定掘削深度の関係から完掘は行わなかった。確認した堆積土は5層に分層でき、調査区の南東側では現代のガラス瓶やゴミなどを含む土によって埋め戻されている。溝の一部が埋没した後に、現代に近い時期まで用水路として利用されていたと考えられる。遺物は3層から土師器片が1点出土している。

5.まとめ

第14次調査の調査地点は、富沢館跡の北西部に位置する。調査では調査区南半部が溝跡の中に収まっていることを確認した。南東側隣接地で行われた第4次調査6区では、土里と区画整理事業以前の用水路に沿うように走るSD92堀跡の南東部分が確認されている。SD1溝跡は規模や位置関係から同一の遺構であると判断される。また、明治時代の地籍図からすると、この堀は一部が埋没した後に水路として利用されていたと推定される。



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物	
				1	2
SD1	1 10YR 4/3 に少し黄褐色	粘土	細砂を含む。1~10mmの礫を含む。		
	2 10YR 4/1 黄褐色	粘土	砂を少量含む。無機物を少量含む。		
	3 10YR 4/1 黄褐色	粘土	無機物を少量含む。		
	4 10YR 5/4 に少し黄褐色	粘土質シルト	砂を含む。		
	5 10YR 5/1 黑灰色	シルト質砂	無機物が下層に充積する。粗砂を含む。		

第33図 第14次調査区平面・断面図



1. SD1 堀跡検出状況（西から）



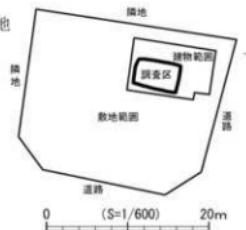
2. 調査区西壁断面（東から）

写真図版 11 富沢館跡第14次調査

第7節 第15次調査

1. 調査要項

遺跡名	富沢館跡（宮城県遺跡登録番号 01246）
調査地点	仙台市太白区富沢駅西土地地区画整理事業 27 街区 17 画地
調査期間	令和元年 9 月 18 日
調査対象面積	63.76 m ²
調査面積	約 15 m ²
調査原因	個人住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主事 柳澤 楓 文化財教諭 元山祐一



第34図 第15次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より令和元年 7 月 30 日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和元年 8 月 1 日付 H31 教生文第 101-178 号で通知）に基づき実施した。

建築範囲内に南北 3m、東西 5m の規模で調査区を設定し、重機により盛土および基本層Ⅰ層上面まで掘削したところ GL-1.0m まで到達したため、調査区を南北 3m、東西 2.5m の範囲に縮小し、重機により基本層Ⅱ～Ⅳ層を除去した。Ⅳ層上面（GL-1.4m 程度）で遺構検出作業を行い、溝跡 1 条、ピット 1 基を確認した。

調査では、調査区平面図（S = 1/50）および断面図（S = 1/20）を作製し、写真記録はデジタルカメラにて行った。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

調査では、盛土（層厚 60 ~ 70cm）の下で基本層を 4 層確認した。

- I 層：10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。調査区の南半分で確認した。II 層ブロックを含む。黄褐色砂を含む。炭化物を少量含む。層厚 50 ~ 60 cm。
- II 層：10YR5/2 灰黄褐色粘土質シルト。黄褐色砂を含む。全体的に酸化鉄を含むが、特に下層との境に集積する。炭化物を僅かに含む。調査区北半分では盛土の直下で確認した。層厚は最大で 50 cm である。水田耕作土と考えられる。
- III 層：10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト。全体的に酸化鉄を含むが、特に下層との境に集積する。炭化物を僅かに含む。層厚 10 ~ 20 cm で、耕作土と考えられる。
- IV 層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。10YR4/1 暗灰色粘土ブロックを含む。酸化鉄を含む。今回の遺構検出面である。層厚 20cm 以上。

4. 発見遺構と出土遺物

SD1 溝跡（第35図）

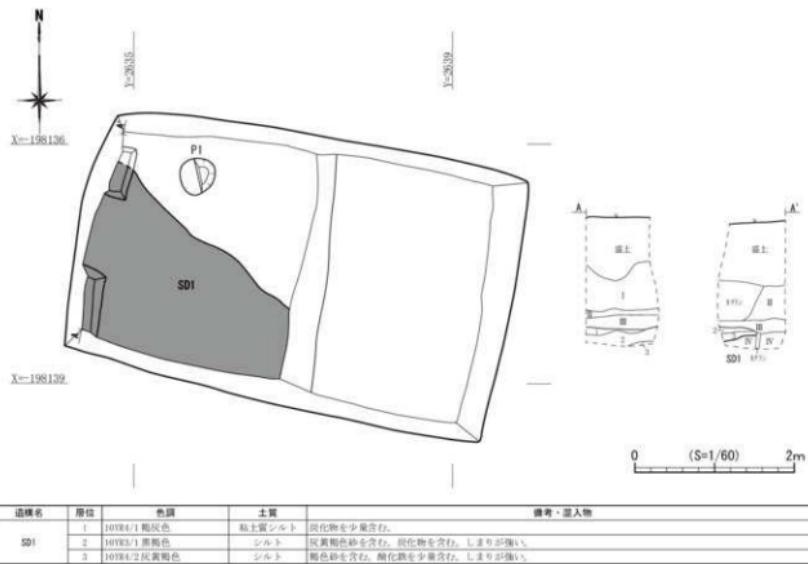
調査区西側で確認した。北西から南東方向の溝跡で、調査区外に延びる。規模は検出長 3.0m、幅 1.7m 以上である。建築物の予定掘削深度の関係から、検出面から深さ 20 cmまでの掘削で止めており、完掘していない。遺物は出土していない。

ピット（第35図）

調査区北側で1基確認した。直径約40cmで、深さは20cmである。柱痕跡は確認されず、遺物も出土していない。

5.まとめ

第15次調査の調査地点は、富沢館跡の東端に位置し、第4次調査で確認されたA区 SD87 堀跡の延長が想定された地点である。調査では、調査区の南西側の大部分がSD1溝跡跡の堆積土であることを確認した。SD1溝跡は遺物も出土していないことから、詳細な規模や時期については不明であるが、幅1.7m以上と規模が大きく、想定された方向へと延びることから城館の北東部を構成する堀跡の一部であったと推定される。



第35図 第15次調査区平面・断面図



1. SD1溝跡検出状況（南から）



1. SD1溝跡土層断面（南から）

写真図版 12 富沢館跡第15次調査

第8節 第16次調査

遺 跡 名 富沢館跡（宮城県遺跡登録番号 01246）
 調 査 地 点 仙台市太白区富沢字館 31番1、94番1、94番6、
 94番7、94番8、94番9、水の各一部（29B-52L）
 調 査 期 間 令和元年 10月 17日
 調査対象面積 94.11 m²
 調査面積 約 15 m²
 調査原因 個人住宅建築工事
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査原因 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
 担当職員 主事 須貝慎吾 文化財教諭 元山祐一



第36図 第16次調査区配図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、申請者より令和元年 9月 30 日付で提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（令和元年 10月 2 日付 H31 教生文第 101-268 号で通知）に基づき実施した。

対象地内に南北 3m、東西 5m の調査区を設定し、重機により盛土および基本層Ⅰ層～Ⅱ層を除去した後、Ⅲ層上面（GL-1.9m 程度）で、溝跡 2 条を確認した。

調査では、必要に応じてデジタルカメラにより記録写真を撮影し、調査区平面図（S = 1/50）と断面図（S = 1/20）を作製した。記録作業終了後、重機により埋め戻しを行い、調査を終了した。

3. 基本層序

今回の調査では、盛土（層厚 50 ~ 60cm）の下に基本層を大別 3 層、細別 5 層確認した。遺構検出面であるⅢ層上面までの深さは 1.6m である。

- I 層 : 10YR5/2 灰黄褐色シルト。炭化物・小礫を少量含む。区画整理以前の旧表土と考えられる。
- II a 層 : 10YR2/2 黒褐色粘土。小礫を少量含む。耕作土層と考えられる。
- II b 層 : 10YR4/6 暗褐色粘土。小礫を少量含む。耕作土層と考えられる。
- II c 層 : 10YR3/2 黒褐色粘土。小礫を少量含む。耕作土層と考えられる。
- III 層 : 10YR3/2 黒褐色シルト。砂を少量含む。

4. 発見遺構と出土遺物

SD1 溝跡（第37図）

調査区南東側で確認した。検出長は 0.5m で、南西から北東方向にかけて調査区外に延びる。建築物の掘削深度の関係により完全掘は行わなかったが、南壁で溝状の落ち込みを確認した。堆積土は 1 層確認した。遺物は出土していない。

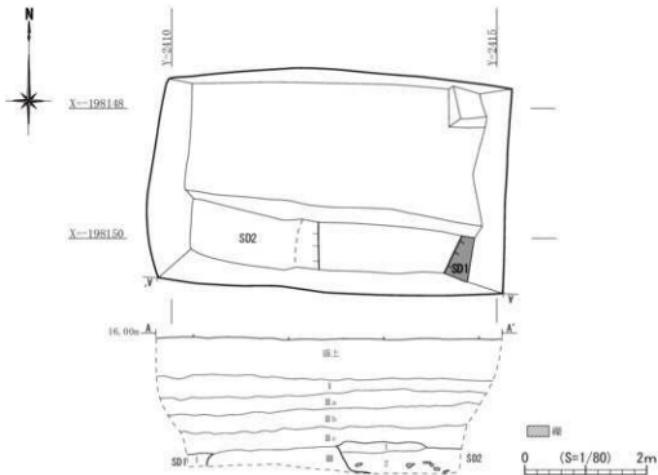
SD2 溝跡（第37図）

調査区南西側で確認した。南から北方向への溝跡で、その両端は調査区外へと延びる。建築物の掘削深度の関係

により完掘はしていない。規模は幅2.0m以上、深さ0.5m以上。堆積土は2層確認した。砂がラミナ状に堆積する水成堆積であり、下層には礫（ ϕ 50～60mm）が多く混入する。

5.まとめ

今回の調査地点は、富沢館跡の主郭部北側に位置する。調査では、基本層Ⅲ層上面で溝跡2条を確認した。SD1溝跡は、一部分のみの小さい範囲の検出であったが、過年度の調査で確認されているSD92堀跡と一連する堀跡の可能性があり、堀跡であれば主郭の堀幅が西側に広がる可能性が想定される。



第37図 第16次調査区平面・断面図



1. SD1溝跡検出状況（南から）



2. 調査区南壁断面（北から）

写真図版 13 富沢館跡第16次調査



第38図 富沢館跡 検出査跡位置図

第5章 中田南遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

中田南遺跡は、仙台市の南東部、JR 南仙台駅の南 0.8 km に位置し、遺跡の南側は名取市に接する。名取川やその支流によって形成された標高 7 ~ 8 m の自然堤防上に立地している。遺跡の広がりは東西約 500m、南北約 200m である。周辺の遺跡には中田北遺跡（2）、前田館跡（4）、壇腰遺跡（3）、上余田遺跡などが所在する。

これまで行われた発掘調査では、古墳時代から中世にかけての遺構、遺物が多数発見されたほか、繩文土器や弥生土器も出土している。古墳時代は竪穴住居跡が数軒見つかっているのみであるが、奈良時代前半には竪穴住居跡 37 軒、掘立柱建物跡 20 棟等、計画的に造られた大集落が出現する。遺物では銅製品の铸造に関わる土器やフイゴの羽口、関東地方と関連のある土器などが注目される。これらのことから、この集落には一般集落とは異なり当時の役所と関連する人々が住んでいたと考えられるが、平安時代前半には小規模な集落となり 10 世紀には一時断絶する。その後、中世になると屋敷や屋敷を囲む堀などが造られ、竪穴遺構や井戸跡なども発見されており、国産の陶器類や中国産の磁器等が出土している。

第2節 第6次調査

1. 調査要項

遺跡名 中田南遺跡

（宮城県遺跡登録番号 01272）

調査地点 仙台市太白区中田七丁目 203-10

調査期間 平成 30 年 12 月 13 日

調査対象面積 68.73 m²

調査面積 12 m²

調査原因 個人住宅建築工事

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課

調査調整係

担当職員 主事 柳澤 楓

文化財教諭 佐藤 文征



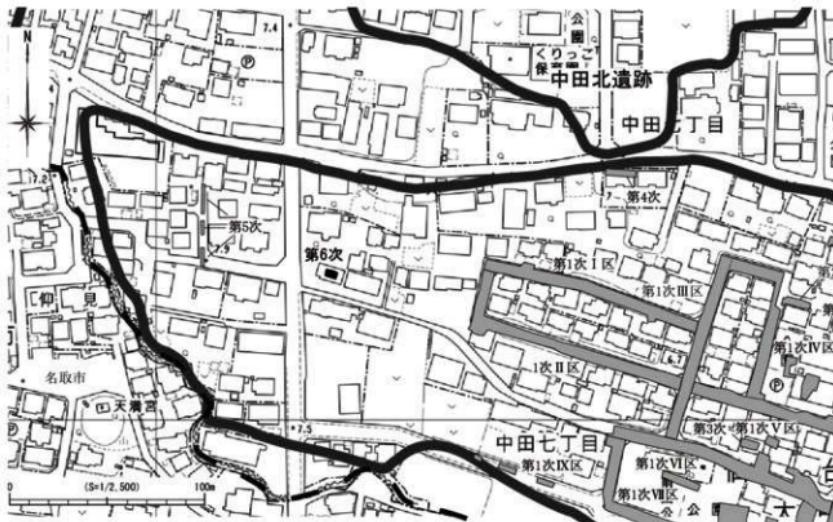
第39図 中田南遺跡と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成 30 年 11 月 26 日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成 30 年 11 月 29 日付 H30 教生文第 102-420 号で通知）に基づき実施した。

対象地に南北 3 m、東西 4 m の調査区を設定した。重機により盛土および基本層 I 層および II 層を除去し、GL-1.2m で遺構面である基本層 III 層上面に到達し、部分的ではあるが、土坑 1 基、ピット 4 基を確認した。

調査では適宜、平面図および断面図 (S = 1/20) を作製し、写真記録はデジタルカメラにより撮影した。記録作業終了後、重機により埋戻しを行い、調査を終了した。



第40図 第6次調査区位置図

3. 基本層序

厚さ 50 ~ 70 cm の盛土の下に基本層を大別 3 層、細別 4 層確認した。

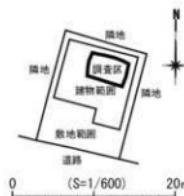
遺構検出面であるⅢ層上面までの深さは1.1mである。

- I a層：10YR3/4 暗褐色シルト。灰黃褐色粘土ブロック、炭化粒（ ϕ 5 mm）を少量含む。層厚 10 ~ 30 cmである。

I b層：10YR3/3 暗褐色シルト。炭化粒（ ϕ 5 mm）を少量含む。層厚 10 ~ 20 cmである。

II 層：10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。
III 層：ブロック（ ϕ 2 ~ 5 cm）
少量含む。層厚 10 ~ 18 cmである。

III 層：10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。暗褐色粘土ブロックを少量含む。層厚は不明である。



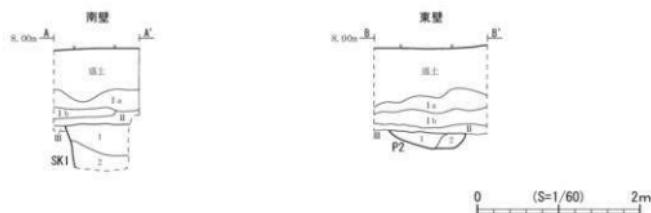
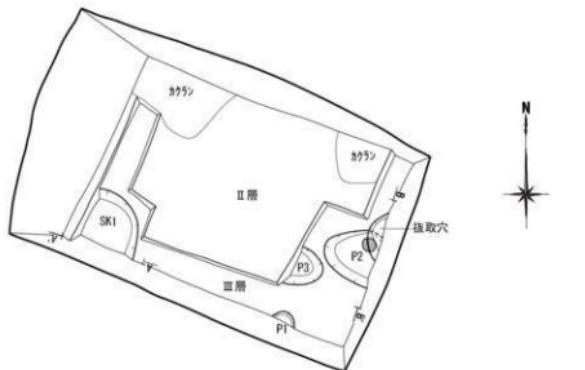
第41図 第6次調査調査区配置図

4. 発見遺構と出土遺物

(1) 土坑

SK1 土坑（第42図）

調査区南西隅で確認した。部分的な確認であるが平面形は円形を呈すると考えられる。規模は径80cm以上である。安全面を考慮し完掘はしていない。壁はほぼ垂直に近い角度で立ち上がる。遺構の規模や壁面の立ち上がり、堆積土の状況から井戸跡の可能性が高いと考えられるが、全体を把握することはできなかったため、井戸跡ではなく土坑とした。堆積土は2層確認でき、いずれも人為的な埋め土である。遺物は、須恵器片、土師器片が出土している。



遺構名	層位	色調	土質	備考・出土物
SKI	I	10YR2/3 黒褐色	粘土	重層ブロック（φ 2～5 cm）既状に含む。人為的堆土。
	II	10YR2/2 黒褐色	粘土	重層ブロック（φ 10 cm）既状に多量に含む。人為的堆土。
P1	I	10YR3/4 切割色	粘土質シルト	重層ブロックをごく僅かに含む。
	II	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	重層ブロック（φ 5 cm）少量含む。
P2	I	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	重層ブロック（φ 5 cm）を僅かに含む。（柱抜取穴）
	II	10YR2/2 黒褐色	粘土	重層ブロックを多量に含む。（柱方墻土）
	III	10YR2/1 黒褐色	粘土	柱跡的窓、炭化木（φ 2 cm）僅かに含む。（柱痕跡）
P3	I	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	柱跡的窓。
	II	10YR3/2 増褐色	粘土質シルト	重層ブロック（φ 2 cm）少量含む。

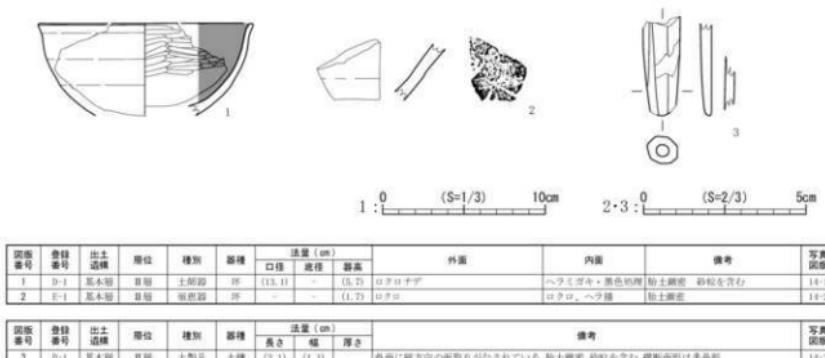
第42図 第6次調査区平面・断面図

(2) ピット

確認したピットは全部で3基である。そのうちP2では柱痕跡と抜き取り穴が確認された。遺物は、各ピットから土師器片が少量出土した。

P2（第42図）

調査区東側で検出した。遺構の一部が調査区外に広がるが、平面形は梢円形を呈すると考えられる。規模は、長軸64cm以上、短軸64cm、深さ18cmである。断面形状は皿形で、柱痕跡部分は、直径16cm、深さ約20cmである。抜取穴の規模は、長軸60cm、短軸20cm以上、深さ20cmである。土師器片が少量出土したが、小片のため掲載していない。



第43図 第6次調査出土遺物

5. 遺構外出土遺物について

基本層から須恵器、土師器、土製品が出土した。そのうちロクロ調整の土師器（第43図1）、須恵器（第43図2）、土製品（第43図3）の3点を掲載した。

1は、环で体部が内済し、口縁部が外反する器形である。2は环の体部片で内面にはヘラ描きが認められる。破片資料であるため、書かれている文字は不明である。3は土鉢である。第1次調査でも様々な遺構から出土しており、大きさや形態により分類されている。出土した土鉢は小型のもので紡錘形に近い形態である。第1次調査の分類によると2B類にあたる。

6.まとめ

今回の調査地点は、中田南遺跡の中央部西寄りに位置する。中田南遺跡では、これまで5次の調査が実施され、特に遺跡の中央部から東側にかけては、第1次調査で、古代の集落跡や中世の屋敷跡等が確認されている。今回の調査ではIII層上面で、土坑1基、ピット3基を確認した。遺物は基本層（I b層・II層）および各遺構から、須恵器、土師器、土製品等が出土している。

遺構から出土した遺物は非ロクロ調整の土師器が多いが、少量ではあるが、ロクロ調整の土師器も出土している。遺物のほとんどが破片資料であるため詳細は不明であるが、今回の調査地点はおよそ9世紀前半頃の集落の一部であったと考えられる。

参考文献

仙台市教育委員会 1994 『仙台市中田南遺跡—古代・中世の集落跡の調査』仙台市文化財調査報告書第182集



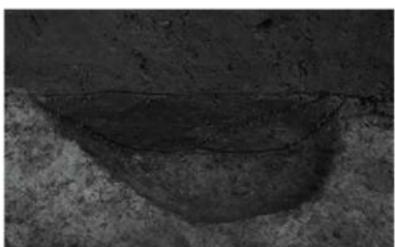
1. 遺構検出状況（北から）



2. P2 完掘状況（西から）



3. P3 土層断面（東から）



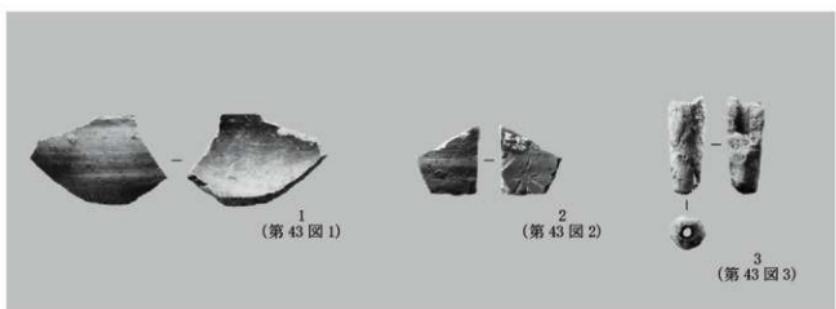
4. P1 土層断面（北から）



5. SK1 土坑土層断面（北から）



6. 調査区全景（東から）



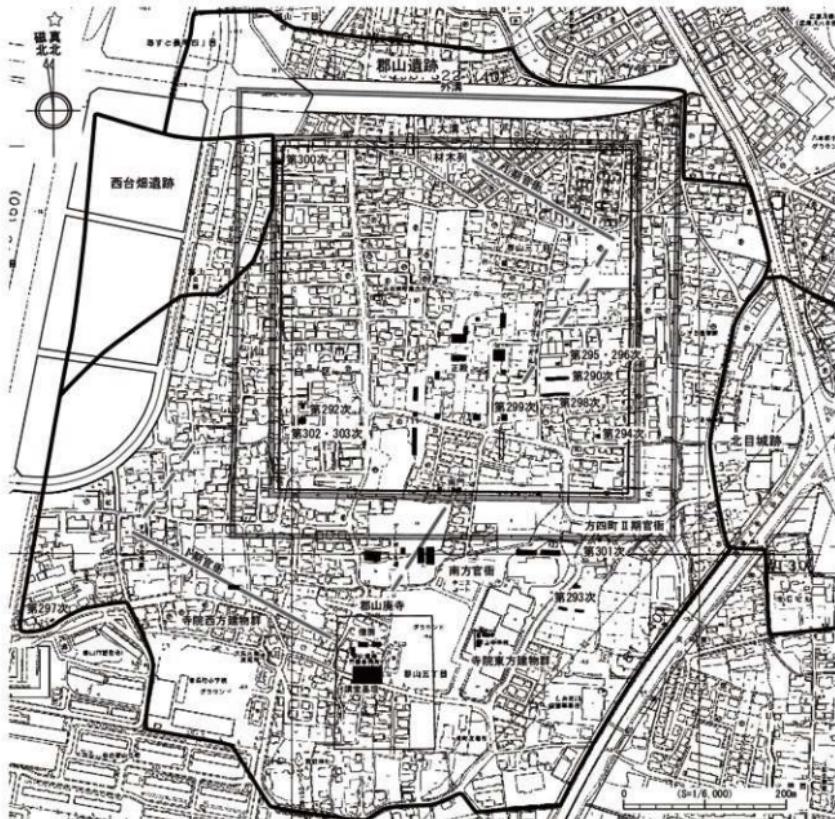
写真図版 14 中田南遺跡第6次調査・出土遺物

第6章 郡山遺跡の調査

平成30年度末から令和元年度に実施した発掘調査は、第44図の通りである。なお、個人住宅建築に伴う発掘調査の結果および抄録は、仙台市文化財調査報告書第484集『郡山遺跡40』に所収している。

表4 令和元年度 郡山遺跡発掘調査一覧（一部平成30年度実施分を含む）

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因	対応
第292次	日廟宮側西詰	約22 m ²	平成31年2月12日～3月8日	個人住宅増築	郡山遺跡は5回調査
第293次	郡山遺跡南東部	約88.83 m ²	平成31年2月18日～2月29日	宅地造成	開発に伴う本年度調査
第294次	日廟宮側南東部	約22 m ²	平成31年2月12日～3月27日	個人住宅増築	郡山遺跡は5回調査
第295次	日廟宮側南東部	約17.5 m ²	令和元年2月4日～6月2日	個人住宅増築	郡山遺跡は5回調査
第296次	日廟宮側南東部	約15 m ²	令和元年2月5日～9日	個人住宅増築	郡山遺跡は5回調査
第297次	郡山遺跡南西詰	約12.5 m ²	令和元年6月25日	個人住宅増築	郡山遺跡は5回調査
第298次	日廟宮側西詰	約27.4 m ²	令和元年7月17日～8月2日	個人住宅増築	郡山遺跡は5回調査
第299次	日廟宮側中軸線南東側	約57.5 m ²	令和元年7月2日～9月12日	範囲確認	開発に伴う本年度調査
第300次	日廟宮側外軸西詰	約30 m ²	令和元年10月2日～10月4日	長期住宅増築	開発に伴う本年度調査
第301次	日廟宮側外軸南側	約30 m ²	令和元年12月9日～12月16日	法律住宅増築	開発に伴う本年度調査
第302次	日廟宮側南西部	約18 m ²	令和元年12月10日～12月23日	個人住宅増築	郡山遺跡は5回調査
第303次	日廟宮側南西詰	約14 m ²	令和元年12月10日～12月23日	個人住宅増築	郡山遺跡は5回調査



第44図 郡山遺跡調査区位置図

第7章 総括

令和元年度に国庫補助対象事業で実施した調査件数は、令和元年12月末で27件（12遺跡）である。本書では平成30年度後半を含め、令和元年12月までに行った調査の中で、別に報告される郡山遺跡を除き12件（4遺跡）の調査について報告した。その成果については以下のようにまとめられる。

1. 洞ノロ遺跡（第25次）

土坑2基とピット26基を検出した。遺物は土師器、須恵器、中世陶器、石製品が出土している。遺構の年代を判断する資料に乏しく、それぞれの詳細な年代については不明であるが、調査区周辺では、古代（9～10世紀）や中世（12～14世紀）の遺構、遺物が多数認められ、集落および屋敷地の広がりが認められることから、これらと一連の遺構であった可能性がある。

2. 南小泉遺跡（第84・85・86次調査）

3か所の調査地点で縄文時代、古墳時代、古代、近世の遺物、遺構が確認された。検出された遺構は竪穴住居跡、竪穴遺構、溝跡、土坑、ピットで、遺物は縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品が出土している。

縄文時代の遺構は確認されていない。遺物は第85次調査で土器が出土した。特徴が乏しいため、明確な時期については不明であるが、口縁部に縄文をもたず、体部に屈曲をもつことから中期～後期にかけての時期に収まると考えられる。南小泉周辺では縄文時代の遺構は確認されておらず、遺物は出土例が少ない。86次にわたる調査の中で出土が報告される例は5件であり、第85次調査地点を含め、出土分布は遺跡の中央部にやや偏る傾向にある。

古墳時代の遺構は確認されていない。遺物は第86次調査で、「関東系土器」が出土した。遺跡西部では第22次調査地点をはじめ、「関東系土器」が出土する集落が広がっている。調査では当該期の遺構は確認されず、遺物の出土も僅少ではあるが、調査区周辺においても同様の性格を持った地点であった可能性がある。遺跡内部における場の使い分けについては、今後も検討していく必要がある。

古代の遺構は第84次調査で竪穴住居跡が1軒検出された。ロクロ調整の土師器を伴い、遺構の年代は9世紀前半と考えられる。調査区周辺では、第14次調査区で同時期の竪穴住居跡が調査されている。検出例は少ないものの遺跡中央部での集落の広がりが推定される。また、第86次調査では竪穴遺構から平瓦が出土した。

近世の遺構は第86次調査で土坑が5基確認された。出土遺物が僅少なことや部分的な確認に止まっており詳細は不明である。

3. 富沢館跡（第9・10・11・12・14・15・16次調査）

7か所の調査地点で堀跡、ピットを検出した。遺物は土師器、須恵器、陶器、磁器の小片がわずかに出土している。各調査区では規模や方向から富沢館跡に関わると推定される堀跡が検出されている。

主郭北西部を構成する堀跡を第14・16次調査で検出した。それぞれの堀跡は位置関係から同一のものと考えられる。第4次調査では、土壘と沿うように堀跡が造られていることが確認されており（6区 SD92 堀跡）、今回の調査で、その堀跡の規模が幅10m程度であることが確認された。

外郭部を構成する堀跡は、第9・10・11・12・15次調査で検出した。第9・10・11・12次調査では西外郭部の堀跡を確認し、その位置関係から第9・10次調査の堀跡は同一遺構と考えられる。第15次調査では東外郭部の堀跡を確認している。

また、各堀跡からは年代を判断する資料は出土していない。これまでの調査を含め、富沢館跡の堀跡は重複関係から新旧関係が認められ、数時期の変遷があることが推定される。城館の造営時期や堀跡等遺構の変遷については、検討が必要であり、調査成果の蓄積が待たれる。

4. 中田南遺跡（第6次）

土坑1基、ピット3基を検出した。遺物は土師器、須恵器、土製品が出土している。遺構の年代を判断する資料は乏しいが、僅かにロクロ調整の土師器が出土している。第1次調査では、古代から中世にかけての集落及び屋敷地が確認されており、調査区周辺においても古代の集落域が広がっていた可能性がある。今後の調査成果の蓄積を待って検討が必要である。

報告書抄録

ふりがな	せんだいへいやのいせきぐん							
書名	仙台平野の遺跡群 30							
副書名	令和元年度 個人住宅他国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第483集							
編著者名	妹尾一樹 柳澤 楓 及川謙作 須貝慎吾 斎野裕彦							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒 980-0011 仙台市青葉区上杉一丁目 5-12 仙台市役所 上杉分庁舎 10階 TEL : 022-214-8894							
発行年月日	令和2年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町	遺跡番号					
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
要約								
洞ノ口遺跡 (第25次)	仙台市宮城野区岩切 洞ノ口	04102 01372	38° 18' 07"	140° 57' 09"	2018.10.22 ~ 2018.10.23	約 14.3 m ²	記録保存 (個人住宅建築)	
	集落跡、城館跡、屋敷跡、水田跡			土坑、ピット		土師器、須恵器、陶器、 石製品		
中世の土坑2基と古代から中世にかけてのピットを16基確認した。								
南小泉遺跡 (第84次)	仙台市若林区遠見塚 一丁目	04103 01021	38° 14' 18"	140° 54' 36"	2018.12.5 ~ 2018.12.7	約 13.4 m ²	記録保存 (個人住宅建築)	
	集落跡、屋敷跡	縄文～近世	堅穴住居跡、溝跡			土師器、須恵器		
9世紀前半頃の堅穴住居跡を1軒、古代の溝跡を1条確認した。								
南小泉遺跡 (第85次)	仙台市若林区遠見塚 二丁目	04103 01021	38° 14' 26"	140° 54' 44"	2018.10.4	約 14.4 m ²	記録保存 (個人住宅建築)	
	集落跡、屋敷跡	縄文～近世	なし			縄文土器		
縄文土器が出土した。								
南小泉遺跡 (第86次)	仙台市若林区南小泉 二丁目	04103 01021	38° 14' 26"	140° 54' 16"	2019.4.8 ~ 2019.4.10	約 11.1 m ²	記録保存 (個人住宅建築)	
	集落跡、屋敷跡	縄文～近世	堅穴遺構、土坑、ピット			土師器、平瓦、陶器、磁器		
古代以降の堅穴遺構を1基、近世頃の土坑を5基確認した。また、土師器では「関東系土器」が出土している。								
富沢城跡 (第9次)	仙台市太白区富沢字 館	04104 01246	38° 12' 50"	140° 51' 36"	2019.1.8 ~ 2019.1.10	9.5 m ²	記録保存 (個人住宅建築)	
	城館跡、集落跡	縄文・平安 ～近世	堀跡			遺物なし		
大規模な溝跡を1条確認した。城館の外郭西部を構成する堀跡と考えられる。								
富沢城跡 (第10次)	仙台市太白区富沢字 館	04104 01246	38° 12' 51"	140° 51' 36"	2019.1.8 ~ 2019.1.10	7.6 m ²	記録保存 (個人住宅建築)	
	城館跡、集落跡	縄文・平安 ～近世	堀跡			土師器		
大規模な溝跡を確認した。城館の外郭西部を構成する堀跡と考えられる。								
富沢城跡 (第11次)	仙台市太白区富沢字 館	04104 01246	38° 12' 53"	140° 51' 34"	2019.1.17	3.8 m ²	記録保存 (個人住宅建築)	
	城館跡、集落跡	縄文・平安 ～近世	堀跡			土師器、須恵器、 陶器、磁器		
大規模な溝跡を確認した。城館の外郭西部を構成する堀跡と考えられる。								
富沢城跡 (第12次)	仙台市太白区富沢字 館	04104 01246	38° 12' 51"	140° 51' 34"	2019.1.15	8.9 m ²	記録保存 (個人住宅建築)	
	城館跡、集落跡	縄文・平安 ～近世	堀跡			土師器		
大規模な溝跡を確認した。城館の外郭西部を構成する堀跡と考えられる。								

仙台市文化財調査報告書第483集
仙台平野の遺跡群30

令和元年度 個人住宅他
国庫補助対象事業に伴う発掘調査報告書

2020年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区上杉1丁目5-12
仙台市役所上杉分庁舎10階
文化財課 TEL 022 (214) 8894

印刷 株式会社 仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹三丁目1-14
TEL 022 (231) 2245㈹
